
イプシロンの任務遂行記

アブソル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イプシロンの任務遂行記

【Nコード】

N9719M

【作者名】

アブソル

【あらすじ】

CIC軍の情報作戦本部、通称「情報部」

川神雄太、通称「ユウタ」コードネーム「イプシロン」は任務のため今日も行く

数々の任務をこなす先に彼を待っているものは――

ブログ 任務の始まり（前書き）

新作投稿です！

が、忙しいので更新しまくるのは夏休みの間だけです。

更新は遅くなると思いますが、よろしくお願いします！

プロローグ 任務の始まり

ここはC I C軍、情報作戦本部。

陸軍、海軍、空軍の全ての性質を受け継ぎ、それら全てとはまた異質な情報作戦本部、通称「情報部」。

ここでは日々国内外問わずあらゆる情報が集まるC I Cの情報活用の心臓部である。

そんな情報部で忙しく働く男が一人。情報部の机に座り、報告書に目を通す一人の青年。髪は茶色に近く短く整えられている。背は170センチ強。

川神雄太。コードネーム「イプシロン」

C I C情報部で最小年である18歳でありながら、非常に優秀な情報部員であり、階級は既に少尉。

が、任務遂行のための手段がかなり過激であるため陰では「C I Cの不良将校」と呼ばれている。

軽い音がして情報部の扉が開く。

「イプシロン君はおるかね？」

そんなC I C情報部に入ってきたのは情報部のロス大佐である。彼はこの情報部を統括するいわば司令塔で、ユウタと同じ陸軍の出身。しかし長く前線を退いていたためちよっと体つきはゆるみ気味

な50代後半のおじさんである。

「大佐殿、このくそ忙しい中呼びになるとはよっぽど重要な用件なんでしょうね」

ユウタが情報部を出て腕を組みながら言う。既に口調は苦々しくなっている。

「はっはっは、少尉、君に重要でない要件を私が言ったことがあるかね？」

「俺が覚えている限りではありませんが」

ユウタの皮肉たっぷりの言葉にこめかみをピクピクと振るわせるロス大佐。

ここで補足説明しておくユウタはロス大佐の直属の部下である。

この二人の陰険なやり取り（漫才）はCICでも名物の一つである。

「……君は万年少尉になりたいのかね？」

ロス大佐の言葉にユウタが一旦黙る、が直ぐに皮肉な笑みを浮かべながら言い返す。

「ご冗談がお上手ですね、大佐。……ではあんたも「万年大佐」ですか！」

「ははは！万年コンビとは面白い！」

「でしょう！」

ハハハハハ、と二人の乾いた笑いが情報部の近くの廊下に響く。廊下を行く人々は皆二人を避けて歩いている。

「……でご利用は？」

「うむ、私の部屋まで来てくれ。そこで説明したい」

（この忙しいときに、めんどくさいオヤジだ！もうちょっと暇なときにしてくれ！）

心の中で毒づきつつユウタは大佐の部屋まで向かっていくのだった。

プロローグ 任務の始まり（後書き）

この作品は「ポケモンハンタージュン」の姉妹作です。

よってポケハンとストーリー進行が被る場合がありますが、ご了承ください。

第一話 任務開始

「で、ご用件は？」

大佐の部屋でユウタが腕を組みながら言う。

ユウタの態度にいささか腹を立てつつも大佐は話し出す。何時ものことだからだ。

「国際警察が少し気になる動きをしている。どうやらP・H・Cのポケモン理工学研究所を調べているらしい」

その言葉にユウタが少し反応する。

「『プロジェクト・キメラ』が・・・漏れたということですか？」

「いや、そんなことならもうとくにP・H・Cは崩壊、我々は大打撃を受けている。その心配は薄いというのが上層部の意見だ。しかし、私としてはどうも胸騒ぎがするのだよ、イプシロン君」

ロス大佐が不安そうに、囁くように言う。

「分かりました。早速調査します」

「頼むぞ、少尉」

「はっ」

ユウタは軽く敬礼をすると部屋から出る。

（大佐があそこまで気に病んでいるとは……。普段はお気楽なおやじだが、これには驚いたな。まあ調べればすむことか）

「あ、川神少尉！」

声がする。

なぜか嬉しそうな声にユウタが振り向くとそこには一人の青年が立っていた。

軍人としては少し長めの髪に優しそうな面持ちで、ニッコリと笑っている。

身長はユウタと比べ同じぐらいだが、少々優男風だ。しかし意外としっかりした体つきから軍人であることが分かる。

「クー、ここではコードネームで呼べよな」

「あ、失礼しました！ えっと……。イプシロン少尉」

このQ^{クイ}こと木下真はC I C情報部の准尉である。年は22歳。何時もニコニコしており誰に対しても、捉えられた敵兵や逮捕されたテロリストに対しても分け隔てなく接し、優しく振舞うとんでもなく寛大な心の持ち主である。

年下のユウタが上官であっても、それをまったく気にせずキラキラした目で見返してくる。

攻撃的な性格のユウタにとってこれ程までに苦手なタイプは他にい

ない。

「クー准尉、それで俺に何か用か？」

「さっきの話聞きました！僕も調査に行きたいです！」

「俺一人で・・・」

ユウタの言葉は最後まで続かなかった。あの子犬のような目で見つめられるのが苦手だからだ。

（くそ！俺は負けないぞ！負けてなるものか！しっかりしろ、俺は上官だ！部下に対しては毅然とした態度でだな・・・くそ、や・・・止める！そんな目（＝小動物のような目）で俺を見るなああああ！）

「・・・分かった、では付いて来い」

「了解です！」

「イプシロン少尉と一緒に調査なんて夢のようです！」

調査にP・H・Cのポケモン理工学研究所に向かうユウタ。その後ろを木下、クーは嬉しそうに付いてくる。

今二人が歩いているのはポケモン理工学研究所の裏にある雑木林。

正面にはガードマンが居るため、裏口から入るつもりなのだ。

二人とも特殊部隊の恰好をしている。ユウタもクーも元は陸軍出だからこの恰好が動きやすいからだ。

「なんでそんなに喜んでるんだ？ただの調査だぜ？」

「少尉が僕の大好きな人だからです！」

その言葉にユウタが一瞬固まる。

（大好き・・・だと！？こいつもしかしてそっち系か！いやしかし・・・でも軍はそっち系が多いとは聞いたが・・・まさか・・・な）

ユウタが少々身構えつつ恐る恐る聞く。

「クー准尉、まさかとは思うが・・・お前、あれか？」

「あれってなんですか？」

クーがコクンと小首を傾げる。

「いや、だから・・・あの、あれだ。男色、かと聞いている」

今度は木下ことクーが固まる番だった。

そしてクーが恐る恐る尋ねる。

「いや、僕は健全な男子ですけど……。少尉がその気ならいつでもお相手します！」

「せんでいい！」

ユウタの強い切り返しにクーがほっとした表情になった。

「よかった。少尉がそっち系で僕の確認とって調査が終わった後でつきり襲われるかと……。それはその時ですけど」

「……。お前は俺という男に不信感を抱いているのか？」

「とんでもありません！さっきの発言を訂正します！僕はイプシロン少尉を尊敬している、という意味で大好きなんです！」

ビシッと敬礼するクー。

それに対したため息をつくユウタ。

「クー、お前はいい奴だ。しかしな、お前の発言にはいろんな意味で誤解される要素が多い。気をつけな」

「Yes、sir！」

「まったく……」

再度ため息をつくユウタは茂みの中を歩いていく。

「目的地の裏口だ」

ユウタが銃を構える。銀色に輝くワルサーPPKだ。

「すつごくかっこいいですね！そのワルサーPPK！」

クーも銃を構えながらまるで少年のような表情を浮かべる。

ついでにクーの拳銃はSIG SAUER P239。コンパクトなボディが特徴だ。

「お前のシグもなかなかだぞ、さて調べていくんだが、辺りには国際警察がいるかもしれん。気を抜くな」

「了解」

ユウタとクーは銃を構えながら研究所の裏口近くまで接近する。

「少尉、誰も居ませんね」

「気を抜くなって言っただろ。こういうときに敵は潜んでるものなんだ」

ギラつく眼光で研究所を見張るユウタにクーが恐々声をだす。

「僕達が相手にしてるのはテロリストではないのですが……」

「油断大敵ってことだ！……研究所に入っていくぞ、準備は良いな」

「了解です」

二人はそのまま建物に入っていこうとするが、その直前でユウタが腕を挙げクーを制した。

「・・・誰か来る」

「!？」

ザッ ザッ ザッと誰かが、おそらく複数の人間がこちらへ歩いてくる音がする。

（もう隠れる暇は無い。もし敵だったら相手になってやる!）

「少尉・・・!」

「慌てるな、クー。銃の構えを崩すなよ」

どうやら話ながら近づいているらしく、どんどん声が迫ってきた。

そして、ユウタの目に飛び込んだのは。

「嘘だろ・・・!？」

ユウタが啞然とする。

目に入ってきたのは、そう・・・アグノムになってしまったポケモンハンター、ジュンだった。

ジュンは見知らぬ年代の少年と、なんと国際警察を連れて来ていた。

そして……

「っ!？ ユウタ、何でここに……!？」

気づかれた。ジュンが目をまん丸にして驚いている。

「何なの、その軍隊ファッション。しかも銃まで……」

「ジュン、お前こそなんで人間に……？」

「そうだな、君には話していいかな。実はねー」

ジュンは話し出した。ジュンがずっと前からカメラの存在に気づいていたこと。プロジェクト・カメラを知ってしまったことも。そして自身がカメラ化されたことも――

（くそマジかよ!じゃあ何か、エリカはP・H・Cを潰し、CICに大打撃を与えるためにジュンに力と情報を与えてワザと逃がしたってのか……!こいつは俺達も完全に騙されてたぜ。それに情報が国際警察に渡ってるとは……!）

「で、君が何でそんな姿なのか教えてくれよ」

（……仕方ない。こっちも教えなきゃまずいか……）

ユウタも口を開く。

「俺はCIC情報部のエージェント、コードネーム「イプシロン」。階級は少尉だ。P・H・Cに裏切り者が居ないかを監視するために

ずっとハンターとして入り込んでいた。……プロジェクト・キメラを守るためにな」

その言葉にジュンが黙る。

「君はプロジェクト・キメラを知っていたの？」

「ああ……おい国際警察！」

ユウタはスツと国際警察の少年に銃を向ける。

「このことは忘れる。今は見逃してやる。今すぐ退け。じゃないとここで射殺するぞ」

「くそ！」

コウキが銃を取り出そうとするが、バンツとユウタが放った銃弾が銃をその手から弾き飛ばす。

「次は心臓を狙う。さあ、退け。この件は国際警察が感知しきれない問題じゃない。重要な国家機密だ」

「プロジェクト・キメラなんて計画を立てて何が機密だ！」

コウキがユウタに飛びかかる。

「くそ」

ユウタは引き金に指をかけ、撃とうとするが……。

「静まるんだ！」

辺りに響き渡る一喝。

その迫力にユウタもコウキもクーも言葉を失う。

「ユウタ、『プロジェクト・キメラ』は君達C I Cにとって災いの種だ。即刻摘み取らなきゃやばいよ」

「馬鹿な！この計画が成功すればポケモンの一元的な管理が――」

「君達はエリカに踊らされてるんだ！P・H・CもC I Cも欲に目がくらんでいる！」

その言葉にユウタが少しジュンから目線を逸らす。

「……俺だって本当は……だけどよ、C I Cがこの計画にどれだけの出費を……」

「エリカはおそらく君達をつぶしにかかるよ。P・H・Cを潰した後でね」

「そんな！僕達C I Cを潰せるわけが……！」

クーが珍しく激しい口調になる。

「潰せるんだ。エリカはおそらく計画が漏洩して世界中から攻撃的になるであろうC I Cを潰す。必ずね」

「待て、P・H・CとC I Cを潰すメリットはどこにある！？そん

なりスキーなことを・・・」

「君達の下には出来ない何かをしようとしているんだ。彼女はおそらく、キメラ技術を彼女、いや彼女達の一派だけのものとした後どこかの組織と商売をするつもりだ」

「金儲けのために俺達を・・・？」

「いや、エリカはそんなタイプじゃない。おそらくそれによって得た膨大な金を利用して、何かをしようとしている。君達の元でさえ許されない研究をね」

そんな馬鹿な。

ユウタはふうと立ちくらみする。

「どうにかして防げないのか？」

「手はある」

ジュンの言葉にユウタのみならずクーとコウキも生唾を飲む。

「彼女の開発したキメラ技術はまだ外部に漏れていない。今のうちに彼女を潰せば。ブレインを失ったプロジェクト・キメラは消えうせ、C I Cも打撃を受けない」

「馬鹿な！この計画にどれだけの――」

「じゃ、C I C軍が一人の少女の陰謀に振り回された挙句にP・H・Cと一緒に世界中から集中砲火を浴びることになってもいいんだね

「？軍の権威とプライドは一瞬で失墜するよ」

ユウタは近くの石に腰掛、腕を組む。

「……上層部が今更プロジェクト・キメラを中止するとは思えん。この話を聞いたらエリカを消しにかかる」

「彼女はそれも想定済みさ。もし自分達の陰謀がばれた時のこともおそらく対策は立てている。暗殺は失敗するよ。100%。それにもし成功しても『プロジェクト・キメラ』なんて計画が存在する限りCICは腐り続けるよ？」

「じゃあどうすればいいんだ！」

イライラ口調のユウタにジュンが少し微笑む。

「軍に気づかれずにエリカ達一派を潰せばいいんだよ。それには君と国際警察両方の協力が必要だ——」

静かに語るジュン。

運命の時は近づこうとしていた――

第二話 覚悟と・・・

「馬鹿な！？俺に軍を裏切れと！」

ユウタの怒号があたりに響く。

「それは違うよ。エリカの魔の手から軍を救うのさ」

その言葉にユウタが沈痛な面持ちで手に顔を埋める。

「おい、ポケモンハンター！何勝手なことを・・・！？最初の話と違うぜ！」

その横でコウキがジュンを睨む。

「考えが変わったんだよ。このままP・H・Cを潰してC I Cに打撃を与えてしまえば、エリカの思う壺だ」

「でも『プロジェクト・キメラ』なんて計画立てた奴らは許せないぜ！そいつ等の罪を不問にしろと！？」

「ここでエリカの計画通りに動けば、どっち道この世の平安は崩れるよ？おそらく国際警察も手をつけられない。・・・君達は災いの種を蒔こうとしていたんだ。無論、僕もさっきまでは」

ジュンの静かな言葉にコウキがムツツリとした表情になる。

「・・・分かった。俺から親父にこの旨を伝えておく。エリカの計画を潰すほうが最終優先だからな。だが、今度もしこういうことが

あれば・・・分かってるな！？それから取引は中止だな。ハンターの情報は貰っていくぞ」

コウキはそう言うと言っていてしまった。

「・・・ジュン、何か考えがあるのか？」

夜の研究所にはユウタとクーそしてジュンしか居なくなってしまった。

ユウタが重い口を開く。

「まあね。僕達が『プロジェクト・キメラ』の情報を流してP・H・CとC I Cを攻撃しないと分かれれば、彼女達は必ず動く。君にはその動向を監視して欲しい。もちろん、上層部はもちろん他の仲間にも内緒だね」

「あのー僕は・・・？」

既に場違いな存在となっている木下真ことQ^{クイ}が恐る恐る尋ねる。

なかばその存在を忘れていたのだろう。ジュンがポカンとした顔になる。

「・・・誰？」

「僕は木下真であります！階級は准尉。コードネーム「クー」です。よろしく！」

「へえーなんか子犬みたいなコードネームだね」

「え・・・子犬、ですか・・・？」

「クー、お前は俺の補佐をしろ。それからこのことは俺達だけの秘密だ。絶対に誰にも喋るな！喋ったら射殺の上、百叩きだ！分かったか！」

横から放ったユウタの言葉にクーが「はっ」と答える。

「じゃあ頼むよ。絶対に軍内部にエリカの協力者が居るはずだ。それを調べておいてね、少尉殿」

「分かった」

短く答えるとユウタは慌ててあとを追ってくるクーと共に研究所をあとにした――

途中クーが心配そうにユウタに話しかけてくる。

「大丈夫なんですかね・・・僕心配で・・・」

「シャキツとしろ。俺達はスパイだ。調べ事と隠し事は得意だろうが！」

「でも、軍の鳴り物入りの計画を潰すなんて大層なこと・・・」

「C I Cをエリカの陰謀から守るためだ。このことは上層部にも、もちろん大佐にも秘密だ。・・・エリカを潰すのはジュンがやるだろう。俺達はただ内部のエリカの協力者を調べるだけでいい」

そこまで言っても雨に打たれた子犬みたいな表情のクーにユウタが一喝する。

「しっかりしろ！お前軍人だろうが！悪質な陰謀に立ち向かうのが俺達の仕事だ！・・・例えばそれが今の軍の計画を潰すこととなっても、最終的には救うことになるんだ！」

「そうです・・・よね」

「ああ。エリカ達が倒れば『プロジェクト・キメラ』は瓦解する。彼らはP・H・Cと俺達CICを餌にかけた後、どこかデカイ組織とキメラ技術をネタに商売しようとしているんだ。と、言うことはジュンの言ったとおりエリカ一派以外にはまだキメラ技術を知る者は居いないってことだ。だから俺達はジュンをサポートする。俺達の立場上直接エリカ達をたたくことは出来ないからな」

「ジュンさんを陰から支援するってことですか？」

「その通りだ」

クーがふうとため息をつく。

「なんか僕凄いことに巻き込まれました・・・」

「それは俺のセリフだ。さ、さっさと本部に戻るぞ。大佐が待っている」

「了解」

二人はしばらく歩いていた。

その沈黙の中ユウタは黙って考え事をしていた。

（エリカと言っても一人では何も出来ないはずだ。ジュンの言うとおり絶対に協力者はいる。誰なんだ？上層部ではないはずだ。自分達で作り上げた計画を潰したくは無いだろうし、苦勞して手に入れた地位を捨てることなんて出来るわけが無い。かと言って下っ端でも無いだろう。エリカが影響力の無い協力者を選ぶわけが無い。と言ふことは・・・）

上層部ではないが幹部クラスの地位で、軍においてそれなりの影響力を持つ者。

「クー、軍内部の関係者洗っつけ。上層部は後回しでいい、それなりの地位で影響力がある奴を徹底的に調査しろ」

「了解です！イプシロン少尉！」

「頼むぞ」

そしてしばらく歩くとCIC本部につく。

所変わってここは大佐の部屋。

ロス大佐がゆったりと椅子に座っている。

「イプシロン君、調査はどうだった？」

「……何もありませんでした。杞憂だったようですな、大佐」

「そうかね。それはよかった」

ユウタはサラリと嘘の報告をする。スパイという職業柄この手の嘘は得意なのだ。

その報告を聞き、安堵した表情になるロス大佐。

そして直ぐに口を開く。

「さてと、この後の予定は空いているかね、少尉？」

ロス大佐の言葉に一瞬戸惑うが、直ぐに答える。

「ええ……特に予定はありませんが」

「では私と飯を食いにいかんか？奢ってやるぞ」

ロス大佐は満足そうに頷きながら両肘を机において手を組んでいる。

（このオヤジ……！俺は今日はゆっくり自宅で飯を食べたい気分だったんだ！ったくめんどくさい……何でこんなタイミングに！）

あからさまに苦々しい表情のユウタにロス大佐は益々満足そうだ。

実は彼はユウタが一人でゆっくり食べたいことを知っている……のだが、普段の横柄な態度に対して善意のベールに包んだ仕返しをしている、と言うわけだ。

(ふっふっふ・困っているな、少尉。君の考えは手に取るように分かるぞ。上司の誘いじゃ断れんだろう。いい気味だ)

内心ほくそ笑む大佐だが表面上はニコニコと笑い続けている。

「・・・分かりました。大佐が奢ってくれるのなら」

「では行こうか」

ロス大佐とユウタは部屋から出る。

二人が部屋から出た後直ぐ、クーと出会う。

どうやら彼も食事に行こうとしていたようだ。財布の中身を見てため息をついていた。薄給なのだから仕方が無い。

その時、ユウタの頭にあるアイデアが浮かぶ。

「ロス大佐、クーも誘って良いですか？」

「え・・何故だね？」

「大佐殿は太っ腹ですものな・・クーにももちろん奢りますね？」

ユウタはさっさとクーに近づく。

「クー、俺達と食事をしよう。大佐が全部奢ってくれるそうだ」

「しょ・・少尉。そんな勝手に・・」

「え、良いんですか！ロス大佐！有難うございます！」

ロス大佐が止めるまもなくユウタの言葉を聞いたクーが目をキラキラさせて嬉しそうな表情をする。

「大佐殿は部下のためなら出し惜しみはしませんもんなあ」

ユウタのねっとりした言葉にロス大佐も無理に微笑む。

「も・もちろんだよ、少尉。クー君ついて来たまえ」

（大佐め、これでかなりの額を奢ることになるぞ。ざまあみろだな）

（あいつはわざとクーを誘ったんだな！私の財布にダメージを与えるために・・・なんて奴だ！上官を陥れるとは・・・！こうなったら徹底抗戦だ！）

（やった！金欠気味で困ってたんだ！よし、高いものを遠慮なく注文するぞ！）
（なんとって大佐のおごりだもんね！）

ほくそ笑む者、腹立つも者、嬉しがる者あり――

様々な思惑が交差する中、三人は本部の外のレストランに向かう。

低レベルな水面下の戦いが始まろうとしていた。

第二話 覚悟と・・・（後書き）

次話はユウタとロス大佐とクー准尉の水面下の熾烈な（笑）戦いで
す。

初めてポケモンも出てきますので。

第三話 仁義なき戦い

「ここにしようか」

ロス大佐が指差した先にはレストランがあった。洋風のつくりの外見にステンドグラスの窓とかなり洒落た店だ。

さらにガラス張りの厨房ではポケモンと人間が共に料理を作っていた。

ここはレストラン・ポケル。ポケモンの語を省略し、その後に語尾“ル”という意味不明な名前の店だ。

しかし味は確かで、CIC本部と演習場の近くにあることから常に賑わっている。

ユウタ、ロス大佐、そしてクーの三人は店に入ると近くの席に座った。

「さあ、どんなものでも注文したまえ」

「そうですか、じゃあ僕はこのラムの实のクリームソーテを」

大佐がふとメニューに目を落とす。

「ラムの实のクリームソーテ」一品9000円也。レアな木の実を使った料理なのだから当然である。

その値段を見た瞬間、ロス大佐が凍りつく。

（う・・・高い！）

「く・・・クー准尉少々値が張るようだが・・・」

「大佐、俺も同じものにします」

ユウタが空かさず注文する。

（こいつ・・・汚い手で私に仕返しするつもりだな！？）

「部下のためには迷わず自腹を切る。そういうところを俺は尊敬し
とるんですよ？」

「僕もです！」

そこまで言われると退くに退けなくなる大佐。

無理に微笑むと声を震わせながら言った。

「あと俺は未成年ですのでオレンジジュースで」

「僕はビールを飲みたいです！おつまみも欲しいです！」

（く・・・上官を差し置いて厚かましい奴らだ・・・！！）

オレンジジュース200円。ビール一杯400円。おつまみ420円

「いいだろう」

その後大佐はオボンの実のトマトクリームがけ（2000円）と赤ワイン（一杯1100円）を注文し、合計金額は22120円也。

既に大佐の予算はオーバーしていた。これにより大佐は部下より値段が低い料理を注文しなければいけなくなったのだ。

注文が決まったことで大佐がウェイターを呼ぶ。

ユウタ達のテーブルに来たウェイターはサラサラとした髪の長身の美人だった。

その姿にしばし見とれるクー准尉。

何度も言うがレストラン・ポケルはCIC軍に隣接している。それは必然的にこの店には男性が多く来る、と言うことを意味しており、この店の味もさることながらこの美人ウェイターを見るために来るリピーターも多いとか。

「ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

「ああ」

注文をとり終わったウェイターがテーブルを去る。

「彼女、なかなか綺麗だな」

ロス大佐が何気なく言う。

「この店には彼女目的の男性も多いと聞きます」

「確かに綺麗ですね」

そんなことを言い合っているうちに料理が来た。

三人が食べ始める直前にロス大佐が口を開く。

「……90はあったな。どうだったかね、少尉」

「±1センチの誤差で87・56・90ですな。ウエストの締めすぎが体のバランスを狂わせています」

料理を食べながらボソリと呟くユウタ。

「何だかんだ言って君も見ているじゃないか」

料理を口に運びながら皮肉そうに言うロス大佐。

既に二人のバトルは始まっていた。

「俺は職業意識上あらゆる人物を見るとその体系の数値を一瞬で目測する癖があるのです。あんたのような邪な心はありはしません」

「……自分のスケベ根性を職業意識に摩り替えてはいかんなあ」

「大佐こそ見ていたのは首から下だけでしょう？それこそ中年の醜悪なスケベ根性です。軍人がそんなことでどうするのです？少しは俺が尊敬できることをなさってください。そんなことをしているから何時までも大佐で足踏みをしているのです」

その言葉に大佐がしばし黙り込む。が、直ぐに口を開いた。非常に

苦々しい声で。

「————私を軽蔑しているのだな、イプシロン君」

「言うまでも無いことです」

料理を口に運びつつ言う。

二人の間で火花が飛び散る（心象風景）。そしてその間で小さくなり辛そうにしながらも食いだめをするクー准尉。

しばしの沈黙の後ユウタが皮肉たっぷりの言葉を放つ。既に料理の味などしなくなっていた。

「C I C 情報部の司令塔がそんなことでどうするのです。少しは節度・節制という言葉覚えていただきたい」

「節度・節制！君が言うかね、その言葉を！某ポケモン救助部隊の仲間を拉致し、爆弾首輪をつけたり。船を爆破したりする君が！」

ロス大佐がユウタを指差す。

「任務を確実に迅速にこなすためです。俺のやり方にとにかく言わんで頂きたい！」

ユウタはオレンジジュースをガブガブ飲みながら言う。

「そうはいかんよ。私は君の上官だ。君の行動の責任は私に降ってかかるのだ……。少しは私の立場を考えたまえ！！」

「——————なるほど、あんたが何時までも大佐止まりなのは俺のせいだと仰りたいのですな？」

「君こそずっと『万年少尉』でいるのは私が原因だと考えているのだろう？ 似たような境遇の二人がお互いに嘲笑しあうことを『目くそ鼻くそを笑う』と言うのだよ。はっはっはっはっはっは！」

「あんた、自分が鼻くそだと自覚しましたな」

「……………」

二人の間に絶対的な沈黙が流れる。ただ料理を黙々と食べる音がするのみ。遂に耐えられなくなったのかクーが逃げるようにトイレにたつ。

しばらくして……。

「クー君にはもうちょっとスタミナが欲しいな。あれではいかん。軍人としてやっていけないぞ」

「まったくです」

怒りの矛先をクーに向けつつ、さらに黙々と料理を食べる二人。

クーが辛そうな顔をしながら戻ってくる。どうやらトイレに立っている間に二人の空気が変わることを期待していたようだが当てが外れたようだ。

「……なあ、クーも大佐はもう少し何かを学んだほうがいいと、そう思うだろ？」

突然ユウタがクーに尋ねてくる。どうやらクーを味方につけようとしているらしい。

「クー准尉。君は私の味方をしてくれると信じているぞ？イプシロン少尉はもう少し丸くなったほうがいいと、そう思わんかね？」

今度はロス大佐がクーを巻き込んでくる。彼もこの戦いに勝利するために手段を選んでは居られなくなったようだ。

「え……えつと僕は……」

ユウタとロス大佐の間で板ばさみになり困り果てるクー。冷房が効いているレストラン内で冷や汗をかいている。

その様子を周りの軍人やポケモン達は気の毒そうに見ていたのだった。

黙りこくるクーにイラついたのかユウタが口を開く。

「クー……お前まさか大佐に寝返るのか？直接の上官は俺だというのを忘れているようだな？」

「クー准尉。そう言えばもう直ぐボーナス査定があるが……君の返答によってはボーナスをやれんかもしれんぞ？」

「大佐、そういうのを職権乱用と言うのです。元々薄い人望が益々薄くなりますよ。なあ、クーもそう思うだろ？」

「少尉こそ元々あまりない上層部のウケの良さが益々なくなるかも

しれんなぁ・・・そうは思わんかね、クー准尉」

二人がズイィと身を乗り出す。もはやこの戦いは二人だけの戦いではないのだ。レストランの他の人やポケモンも気まずそうに食っている。

「あ・・・あの・・・僕は・・・僕は・・・」

「クー！お前は俺の味方だよな！？」

「准尉、私を裏切るのかね！？」

最早他人の目など気にせずクーににじり寄る二人。

「す・・・すいません・・・し・・・失礼しますっっ！」

遂に耐えられなくなったクーは泣きそうな声で（実際泣いていた）レストランを飛び出して行ってしまった。

「・・・・・・・・さて私たちもお開きにしようか」

「大佐、ご馳走になりました」

クーが去ってしまった後ユウタと大佐は無表情と言う名の仮面をつけ、さっさと会計を終える。

「今日は実に楽しかったよ。君との食事は愉快だな。はっはっは」

「俺もまた来たいです。有意義な夜でした、ははははは」

レストランの出入り口でユウタとロス大佐はお互いに上っ面の笑顔を顔に貼りつけそのまま分かれたのだった。

ついでに二人が出て行った後レストラン内では「やっと出て行ってくれたか」等のため息混じりのセリフがあちこちで聞こえたそう。

（まったく最悪の夜だった。あのオヤジふざけやがって。何が「万年少尉」だ！何が「スケベ根性」だ！テメーに言われたくないんだよ！これから大佐と食事に絶対行くものか！家に帰ってカップラーメンでも食ってたほうがマシだ！）

帰りの道を怒りながらズンズン進んでいくユウタ。相当頭にきているらしく何時もより眼光が鋭くなっている。

「少尉・・・」

すると後ろから子犬の鳴き声のような声がする。

振り返るとそこにはクーがいた。二人の帰り道は同じなので会うのは仕方がない。

「クーか」

「あの、すいません。僕・・・」

言葉が見つかからないように目を泳がすクーにユウタの怒りも少し鎮火してくる。

「すまなかったな。お前を巻き込んで」

「いえ、そんなことは・・・」

クーが言葉を濁す。実際その通りだからだ。

「俺の家に来るか？カップラーメンぐらいならあるぞ」

前を歩きながら振り返らずにボソリと言う。その言葉はぶっきらぼうだったがどこか優しくかった。ユウタは怒りが最高点に達するのも早い。鎮火するのも早いのだ。

「ではお言葉に甘えて・・・」

その夜二人の胃と心を最も満たしたのはカップラーメンとなったのであった。

ついでにこの二人の戦いはレストランにいたCIC関係者から軍内部に伝えられ後日「仁義無き戦い」の代名詞として、イプシロン少尉とロス大佐の陰険な名漫才の一つに加えられたとか・・・。

第三話 仁義なき戦い（後書き）

今回はギャグ要素強めでしたが、いかがでした？

ついでにクーとは「Q」のドイツ語読みです。

第四話 新任務開始、ターゲットはテロリスト！

「イプシロン君、君に任務を与える」

レストラン騒動から数日後、ユウタは大佐に呼び出され部屋に居た。

何時もの大佐らしくなくとても沈痛な面持ちをしている。

「任務とは・・・」

「『赤い満月』を知っているな？」

「確かかなり大きなテロ組織でしたね。まさかテロ関係の任務ですか？」

『赤い満月』は巨大なテロ組織であり、各地でテロ活動を展開しているC I Cの倒すべき憎き敵である。

「『赤い満月』のテロリストの一人が組織の大ボスに接触するらしいとの情報が入った。君にはそのテロリストを追跡、接触しようとしている相手特定して欲しい」

ロス大佐が一枚の写真を取り出す。

そこには20代の若者の写真が写っていた。

「彼は『赤い満月』のテロリストの一人。通称「アル」だ。彼はこの地図のホテルに泊まり、大ボスとの接触しようとしている」

「了解しました。しかし俺一人では少し不安なのでクーも連れて行きます」

「頼んだぞ。CICはイプシロンに賭けているのだ！必ずや『赤い満月』の大ボスの正体を掴め！これは極めて重大な使命だ！」

「了解！」

身が引き締まる思いで大佐室を後にするユウタ。

（この任務はかなり重大だ。だが、俺の得意分野でもある！必ず成功させるぞ！）

「クー准尉はいるか」

「あ、はい！」

情報部の扉を開けてユウタがクーの名を呼ぶ。

「クー、俺に重大な使命が下った。お前は俺の補佐をしろ」

「重大な使命・・・？」

「『赤い満月』の大ボスの特定だ」

その言葉にクーが一瞬身を引く。

「あのテロ組織の・・・」

「そうだ。こいつがそのテロ組織のメンバーの写真。こいつ自身は

ただの下っ端だが、こいつがこの地図のホテルで大ボスと接触するらしい。俺達の任務は『赤い満月』の大ボス特定だ。この下っ端テロリストの「アル」は今日の便でホテルに向かう。俺達も急ぐぞ」

「了解です」

二人は本部を出ると空港に急いだ。

「あれがターゲットですね？」

飛行機の中で前の席に座っている一人の男。写真に映っている姿と同じだ。その男を新聞の読むふりをして監視するユウタとクー。

その男―「アル」はホテルのパンフレットを熱心に読んでいて二人の監視には気がつかない。なぜか幸せそうな笑みを浮かべている。

「なんか相当熱心に読んでますね・・・」

そんなテロリストの姿にユウタの横の席のクーが耳打ちしてくる。クーは新聞からファッション雑誌に「読むふり」の変更をしている。

「まああれだ。これからあの下っ端テロリストが行くホテルは4つ星で、普通の人間は（給料が、と言う意味）常時には行けないからな。大ボスとの接触を理由に楽しむつもりだろうよ。・・・あそこにはキャバレーもあるしな」

「僕達も楽しみたいです・・・」

クーがため息混じりに呟く。

「俺達は物見遊山で来ているのではないぞ。それを忘れるな。こいつはあくまでテロリストの監視なんだからな！」

「了解しています！」

ユウタ達はテロリストを監視しつつ、飛行機でホテルに向かった。

―ホテル・アレキサンドリア。

ユウタとクーの目の前にはかなり豪華なデラックス・ホテルがそびえ立っていた。

「おお！いかにも豪華絢爛って感じですね！」

クーが黄金でも見るかのような目でホテルを見る。

ターゲットのテロリスト「アル」は足取りも軽く「ホテル・アレキサンドリア」に入っていた。

「行くぞ」

「了解」

ユウタ達もその後を追う。

ホテルの内部はまるで城のようだった。豪華な装飾の数々はまさに超一流ホテルといったところ。

はつきり言ってユウタとクーは場違いも甚だしいがそこは気にせずホテルでチェックインをしようとする。

ホテルに泊まって例のテロリストを監視するためだ。

「シングルを二つ頼む」

ユウタがそう言うとかウンターの係りが申し訳なさそうに言う。

「申し訳ございません。込み合っておりましてダブルベッドつきのお部屋しか残っておりません」

（だ・・・ダブルだとー！男同士が・・・そんな気色悪い・・・！）

だがこれは任務。ユウタはグツと我慢するとホテルの鍵を受け取る。受付の人の怪しげな視線を受け流しつつユウタはクーと共に部屋に向かった。

クーは途中で「アル」の部屋を特定するために、ユウタと分かれた。

ユウタは一人鍵に書かれた番号の部屋に向かう。

7026号室。

カチャリ

ホテルの鍵を使い、部屋の扉を開けるユウタ。

(げげっ・・・まるで新婚部屋じゃないか・・・!!!)

小奇麗に整えられた部屋には大きな新婚カップル用のベッドが置かれていた。

(・・・とりあえず、盗聴器が無いかチェックしておこう)

ユウタはベッド下に潜り込んだり設置されている家具の中を除いたりして盗聴器を探す。

「さすがに無いか」

ふう、とため息をつくユウタはベッドの上に座る。スプリングが利いてる。さすが4つ星ホテルである。

(任務とは言えクーと一緒にここで過ごさなきゃならんとは・・・男二人で新婚部屋とか最悪だぜ)

「うわゝすごい部屋ですね!」

明るく元気な声と共に(おおよそテロリストを監視する軍人とは思えない声)クーが部屋に入ってくる。

クーはしばらく豪華な部屋を嬉しそうに見渡すとユウタの隣に座った。

「クー、テロリストはどうした?」

ユウタの問いにクーは頭を掻きながら言う

「あ、はい。どうもこれからプールに行くらしいですよ。僕は今の内にテロリストの部屋に盗聴器を仕掛けておくんでご心配なく監視をなさってください」

「よし」

ユウタは部屋から出る。

所変わってプールサイド。

ユウタはビーチ用の日傘の下で普段着でテロリストを監視していた。

（くそ・・・さすがにプールサイドで普段着は暑いな。だが海パンには拳銃は隠せないからな・・・あんなもの入れとったら化け物だ）
テロリストの「アル」はプールをバシャバシャと音を立てて泳いでいる。

その涼しげな姿にユウタの心の中で怒りが湧き上がってくる。

（新米ならともかく少尉の俺が見張ってるんだぞ！！俺は忙しいんだ！本部に山ほど仕事を残してるんだ！さっさと行動を起こさねえかこの下っ端テロリスト！！）

しばらくするとターゲットがプールから上がり売店の方に向かう。

こっそりと後をつけていくユウタ。

テロリストはぱらぱらと雑誌を見た後、またプールに戻った。

(通信文らしきものは無い。どうやら思いつきでよったようだな)

ユウタは先ほどテロリストが見ていた雑誌を見るが怪しいものは何も無かった。

「くそやはり監視だけじゃよく分からないな・・・まあクーが仕掛ける盗聴器で何かつかめるだろうが」

その後ずっと監視が続けたが結局何も掴めなかった。

その夜。

ホテルに戻ったテロリストを追いかけてユウタも自室に戻る。

既に汗だくで横を通る人の数人が「何この人？」みたいな視線を投げかけてきた。

「何かつかめましたか？」

自室待機をしていたクーがユウタの脱ぎ散らかした服を拾いながら尋ねる。

「全然だ。あの野郎ずっとプールで遊んでやがったんだぜ。おかげで俺は汗びっしょりだ」

シャワーを浴び終えたユウタは腰にタオルを巻きながら出てくる。

「で、どうだ？盗聴器は上手く作動してるか？」

冷蔵庫からオレンジジュースを取り出し（有料）コップに注ぎつつクーに聞く。

「ばっちりですよ！」

クーが小型装置を作動させる。すると部屋を歩く音が聞こえてきた。しばらくして

『今日はよく遊んだっす』

チャライ声が聞こえてきた。

（な・・・何だこれは・・・！どこぞの軽薄な大学生か何かか！？）

予想外のチャライ声にユウタとクーが顔を見合わせる。

『でもそろそろボスが接触求めてくるっすね・・・接触したらこのパラダイスは終わりっすから今の内に遊んどかないと・・・』

ベッドがバフバフいう音が聞こえる。どうやらベッドの上でスプリングを効かせながらの独り言のようだ。

その後テレビの音と笑い声が聞こえたかと思うと夕食を食べに部屋を出た。

「少尉！僕達も追いましょ！」

「まあまあ」

急いで部屋を出ようとするクーに静止をかける。

「あのアルとかいうチャライテロリストはどうやらこのホテルのレストランに行くらしい。好都合だ」

ユウタはそう言いつつ部屋のカーテンを開ける。そこから見える景色にはなんと前面ガラス張りのレストランが見えていた。

「ここから監視できるからな」

「さすがです、少尉！じゃあここで晩御飯を食べるんですね？」

「その通りだ」

「ルームサービス取りましょう！このホテルのルームサービスはとっても美味しいと評判なんです！」

「駄目だ」

その言葉にクーが固まる。

「え、でも監視しながら食事をするには丁度いいんじゃない？」

「飯はこれだ」

そういつつユウタはカバンをひっくり返す。中から出てきたのは大量のカップラーメン。

「でも・・・経費で落とすぐらいしか僕こんなところで食べられません！4つ星の味を味わいたいです！」

「何言ってるんだ！C I Cは最近財政が苦しいんだ！軍人の務めは任務をこなすだけじゃない！経費削減で祖国に奉仕することも軍務の一つなんだよ！」

「う・・」

顔を伏せるクー。少し泣きそうな顔をしていた。

その姿に少しため息をつくユウタ。

「分かった。じゃあ一番安いやつを取ろう」

結局クーの子犬を思わせる姿に折れたユウタがカップラーメン&ルムサービス（一番安い）を取りそれを二人で分けつつ交互に監視を続けた。

「あ！」

突然双眼鏡で監視していたクーが驚いたような、それでいて些かの羨望が混じったような声を出す。

「どうした？」

ユウタはカップラーメンのスープの最後の汁を飲み干すのを止めクーに近づく。

「あのチャラ男テロリスト、レストランでフルコース食べてます！」

「何!？」

ユウタはクーから双眼鏡をひったくると覗いてみる。

クーの言うとおりのアルはフルコースを幸せそうな表情で頬張っていた。

（あの野郎！俺達がルームサービス一人前を二人で分け合い、カップラーメンで晩飯を凌いでいるのにテロリスト風情がフルコースだと・・・！？許せん・・・！！）

一人前のルームサービスを大の男が分け合ったのだ。カップラーメンの足しがあるとは言ってもはっきり言って物足りなかった。物質的にはなく4つ星ホテルにまで来てケチらなければいけないことに対する腹立ちで満足できなかったのだ。

その怒りはやたらエンジョイし、今現在フルコースを食べているチャライテロリストへの怒りに矛先を変えたのだった。

「許せん！こっから狙撃してやる！人生最後の食事にしてやる！！俺のドラグノフ狙撃銃の餌食にしてやる！！！」

ユウタが鞆からスナイパーライフル、ドラグノフ狙撃銃を取り出す。

「ちょ、逆上しないで下さい少尉！任務中です！」

「分かってる！」

しがみついて止めようとするクーを振り払うとドラグノフを鞆に戻す。少し逆上したことを恥ずかしく思ったのか顔を赤らめていた。

「あ、あいつ部屋に戻っていきますよ」

クーが双眼鏡を覗きながら言う。

「監視は明日に引き続けなきゃいかんな。あのテロリストも監視には気づいていない。かえって寝るだろうさ。俺達も就寝するぞ、明日はまた早起きして監視を続けなきゃな」

「少尉とベッドを共に出来るとは光栄です！」

「誤解を招く言い方をするな！」

（こいつ隠れホモじゃないだろうな！？）

ユウタは布団を一枚丸めるとベッドの中央に仕切りを作った。

「ここから入ってきたら容赦なくベッドから叩き落すからな！」

そういい残すとユウタは頭から布団を被ったのだった――

第四話 新任務開始、ターゲットはテロリスト！（後書き）

ユウタが「ジュン」時代から使用していたライフルが明らかになりました。

ドラグノフ狙撃銃。旧ソビエトが開発したスナイパーライフルです。

第五話 監視（前書き）

今回はホラー（？）要素が少し入ってます

第五話 監視

「もう寝たのか・・・寝つきのいい人だな」

クーに「こっから入ってきたら容赦なくベッドから叩き落すからな！」と言いつつ残しきつと寝てしまったユウタ。

ピカチュウの柄のパジャマを着てグーグーと音を立てて寝ているユウタをしばし眺める。黄色のナイトキャップを被っており先には毛玉の飾りがついていた。

どうやら疲れているらしくかなり熟睡している。

（一緒に居ると疲れる上官だけど、やっぱりまだ子供なんだ・・・
ディ●ニーの小人さんみたいな格好して、なんか可愛い♪）

布団を跳ね除けて眠っているユウタにそっと掛け直してやる。

（なんか母親になった気分・・・）

何せクーのほうが4歳上なのだ。冷静なくせに感情的という複雑な精神構造のユウタに振り回されぎみのクーだがやはり信頼はしているのだ。

「少尉に少しでも触れれば殺されそうだから・・・気をつけないと」

クーも布団を被る。

「じゃ、おやすみなさい」

パチン、と電気を消す。

しばらくの間二人の寝息しか聞こえなかったが・・・しばらくして。

「ぐえっ!？」

蛙の潰れたような声と共にユウタが飛び起きる。

自分の腹の上にはクーの足が乗っている。

「この野郎・・・」

ユウタは眠い目を擦りそつと自分の上からクーの足を退けるが・・・。

「うゝん」

寝返りをうったクーの足が股座に直撃してしまう。

ドスン!

「あぐう!!」

呻き声を上げるとユウタが苦痛のあまりベッドから転げ落ちる。広がる激痛で転げまわるしかなかった。

「・・・この・・・ここは鍛えられないのに・・・」

痛む部分を押さえつつ怒りに任せてクーをベッドから叩き落すユウタ。目には薄っすらと涙が浮かんでいた。

ゴロゴロゴロ、ドスン

鈍い音がしクーが床に転げ落ちる。

「ふん！」

荒い鼻息と共にクーを放置し再び眠る。

が・・・。

「う・・・ん」

クーはズルズルズルとまるで蛇のようにベッドに這い上がり、

「ぐー」

寝ているユウタの上に覆いかぶさった。

「ぐえっ!？」

本日二度目の呻き声。ユウタは足でクーを退けるとベッドからは這い出る。

「何なんだこいつ・・・間違いなく寝てるよな・・・？」

ユウタはクーのパジャマ（雨玉模様）の首根っこを掴み扉の先のソファまで連れて行く。

そして枕と布団を敷くとソファの上にクーを放り投げる。

「これで一安心だ。まったく寝相の悪い奴・・・」

ユウタはベッドに戻る。

黄色のナイトキャップを目元まで下げるとユウタは再び眠りにつく。

だが・・・

カチャリ。

扉が開く音と共に、クーが目を瞑ったままベッドに這って来る。

その気配に目を覚ましたのかユウタが薄っすらと目を開けるとそこにはベッドの上を眠りながら這って来るクーの姿が。

その姿に一瞬背筋が凍るユウタ。

「うぁ・・・」

情け無い声を出しながらユウタはベッドから退散する。

（何なんだこいつ・・・夢遊病か!?!）

ユウタは心の底から湧き上る恐怖を抑えつつ先ほどクーを放り込んだソファまで逃げる。

（ここまでは来ねえだろうな?・・・要するにベッドを占領した

かったんだな。最初からこうすればよかったんだ・・・」

ユウタは恐怖で汗ばんだパジャマを着替え、ポッチャマ柄のブルーのに着替える。

「ついでにナイトキャップも代えるか・・・青色に統一しなくちな」

黄色のナイトキャップをバッグにしまうと青のナイトキャップを引っ張り出し頭に被る。

「やれやれだ」

青いナイトキャップを目元まで下ろして三度目の眠りにつく。

それから随分と時間が立つ。

腹部から聞こえる寝息にユウタの意識が覚醒する。

（ま・・・まさかな・・・！？そんな・・・馬鹿な・・・！！！！）

震える手で暗闇を探るとそこにはクーの頭が―

朝。ターゲットのテロリストが起きる前に朝食を済ませておく為に早起きした二人は部屋で食事をしていた。

「クー、お前は昨夜何か夢を見なかったか？自分がピカチュウやハブネークに変身した夢を」

何気なく尋ねるユウタ。

「いいえ？見てませんよ」

クーは朝ごはんのドーナッツを頬張りながら明るく言う。

「では起きたらソファの上、というのは――？」

「何時もよりぐっすり眠れましたから、夢は見ません。きっと少尉の横で安心したんですね」

「じ……実はなクー」

ユウタが震える声で言う。

「何ですか？」

「い……いや……いい朝だな」

（止めよう。こっちがパニックを起こしそうだ……もうこいつと寝るのはこりごりだ……俺は本当に、本当にゾツとしたんだ！）

オレンジジュースの入ったコップがカタカタと揺れる。思い出した

だけで震えがこみ上げるらしい。

「あの・・・どうしたんですか？少尉、震えてますよ？」

「・・・大丈夫、何でもない」

ユウタは席を立つ。

装置は既に作動しているが盗聴器が拾うのは寝息のみ

（このテロ野郎は何時まで寝てるんだ！もう世間では生産活動が始まってるんだ！さっさと起きやがれ！）

ユウタの怒りの念波が伝わったのか「ふああ」という声が聞こえる。

「起きたようですね」

クーもさすがに真面目な顔になっている。

『ああ、もう8時っすか・・・』

ゴシゴシと言う音が聞こえてくる。どうやら眠い目を擦っているらしい。

『あ、メールが届いてる・・・』

しばらく携帯を操作する音が聞こえるのみだったが、やがて声がする。やや緊張した声に変わっていた。

『ボスが接触を求めてきた・・・何々、今日の夜10時にレストラ

ンっすか・・・』

その一言にユウタとクーが顔を見合わせる。非常に緊張してる顔になっていた。

「少尉・・・！」

「ああ！」

クーが急いで念のためのメモを取る。

『ちえ、もっと遊んでたいのに・・・じゃあ今日はキャバレーに行って遊ぶっす！可愛い女の子をいっぱい抱きたいっす！』

独り言を言いつつアルの足音が響く。どうやら洗面所に行ったらしい。鼻歌混じりで歯磨きの音が聞こえてくる。

「なあ、こいつは本当にテロリストなのか？」

ユウタが怪訝そうな表情になる。まるでチャラく軽薄な大学生のようなノリだ。

「でもCICの情報は間違っって無いと思いますよ。ボスがどうたらっって行っってたし。大体彼がこのホテルに来てること自体が大きな組織の経費を使っってる何よりの証拠です」

「まあ、そうだな」

（しかしこの軽薄さは何とかならんのかな！聞いてるこっちがイライラする・・・もとい、軽薄すぎて和みそうだ！！）

「でも遂に『赤い満月』の重要情報を掴みましたね!!」

興奮気味に言うクー。

「ああ、長らく謎だった『赤い満月』のボスが明らかにするんだ！こいつは重要情報だぜ！クー、遠距離カメラ持ってきたか？」

「もちろんです！」

「一応、あのテロリストの監視は続行する。接触を早めるかも知れん」

ボスの都合で接触が早まる可能性は大にある。だからこそ監視は続行しなければいけないとユウタは判断する。

「でも少尉・・・キャバレーまで行くんですか？」

クーがおずおずと尋ねる。

「当たり前だ！任務の為ならどこにでも、それが軍人の務めだ！」

「少尉、未成年じゃないですか・・・」

その言葉に一瞬固くなる。それもそのはず。ユウタは18才という若さで少尉になるという超異例の出世スピードなのだが、それ故部下が全員年上であり指示を出すときにそれがかなり気になっているのだ。

年齢に関するコンプレックスが逆に強いタイプなのである。

「じゃあクー。お前行け」

若干つつけんどんに言い放った言葉にクーが驚く。

「でも任務中にキャバレーとか良いんですかね・・・？」

と言いつつも嬉しさがこみ上げている表情のクーにユウタが一睨みする。

「遊ぶんじゃねえぞ？こいつはあくまでテロリストの監視だ！分か
ってるな！？」

「了解です！」

（まったく！本当に分かってんのか！にしてもキャバレーか・・・あ
んな女ばっかのとこで酒なんか飲んで楽しいのか・・・？理解できん）
飲酒にも女性にも興味の無いユウタが怪訝そうな顔をしている間ク
ーは楽しそうに浮かれていたのだった。

「俺は店の外から監視してる。都合がいいことに店の近くには喫茶
店があるからな、そこから見張れる。お前は内部からだ」

「了解」

短く答えるクー。

その夜、テロリスト「アル」がキャバレーに入って行く。それ以外
には何のアクションもなかった。

クーは一人後をついて行ったのだった。

店の中の雰囲気は落ち着いていて、各々が楽しそうにホステスと話を盛り上がっている。どうやら話術の上手いホステスが多く居るらしい。

ターゲットはそんな中ホステスと一緒に楽しく笑っていた。

クーは「アル」を見張れる席に何気なく座る。

「おにーさん、こんにちわー」

するとホステスが横に寄り添うように座った。

金髪のいかにもといった風貌でクーは一瞬クラリと来るがグッと我慢する。

「ああ、こんにちは」

どうやら始めてで緊張していると思ったらしく、ホステスはニッコリと笑った。

「おにーさん、こういう店初めてでしょう？」

「まあね・・・下戸だからウーロン茶をもらえるかな」

その言葉にホステスが一瞬驚くが、直ぐにウーロン茶を持ってきて差し出す。

「どうぞ」

「ありがとう」

（ターゲットに動きは無い。ホステスと一緒にいるだけ、か。やっぱりボスとの接触を早めたりはしないな）

ウーロン茶を飲みつつ注意深くターゲットを監視するクー。やはり軍人だけあって眼光は鋭い。

「ねえ、おにーさん」

その時ホステスがクーの体に触れる。

「え、何？」

ホステスは目を瞑ったまま黙って柔らかな手で体に触れていたが、やがて手を引っ込めた。

「軍人でしょ？」

面白そうに言われた言葉。クーの体が一瞬で固くなる。

「え、いや・・・あはは、冗談きついな」

笑って誤魔化そうとするがホステスは微笑んだまま言う。

「しかも誰かを監視してる。でしょ？」

ホステスがクーの耳元で囁く。体が熱くなった気がした。

「何で分かったのかな・・・」

諦めたように呟くクー。

「だっておにーさん全然楽しんでないもの。この店はここらでは一番有名で一番高いんだよ？それに普通キャバレーに下戸は来ないわ。それに優しそうな顔してるけど、体は鍛えられてるし、何より隙が無いもの。いつでも戦えますってオーラが出まくりよ」

ホステスは快活に笑いながらウーロン茶を注ぐ。

「だから分かったのよ。時計とか見るふりしたり、私と喋って楽しむふりしてるけど、ずっと一方向を見てるわ。・・・この店にはね、怪しいお客さんがいっぱい来るの。だから慣れっこなのよ。こういうの。おにーさんはそこまでお金持ってなさそうだし、全然楽しんで無いのにこの店に入れるのは軍人としての任務と経費があるからよ」

「君賢いね・・・」

ホステスの頭の切れに少しクーが身を引く。

無意識の構えにホステスは微笑む。

「やっだー。子犬みたいな顔して身構えないでよく。大丈夫、私興味ないから」

その時先ほどまでいちゃついていたターゲットが動く。どうやら店を出るらしい。

「ああ・・・あのチャライお客さんがターゲットなんだね」

アルを追うために席を立ったクーにホステスが話しかける。

「うん。そうなんだ」

「じゃ、お祈りのキスよ。サービスしちゃう」

ホステスの唇がクーの頬に触れる。

体中が熱くなり固まるクーを面白そうに眺めるホステス。

真っ赤になったままクーがテロリストを追う。

後ろから「頑張ってね」という声を聞きつつ会計を終え店を出たのだった。

第五話 監視（後書き）

次回は遂に「赤い満月」のボスが！

そして驚きの事実も！

第六話 軍とテロリスト

「で、どうだった？クー」

トランシーバーを通じてクーの声が聞こえる。

「行動無しです。やはりターゲットとボスとの接触は情報どおりに行われるかと」

（やはりな・・・）

「そうか。そのまま尾行を続けてくれ」

そう言うスイッチを切る。

今ユウタはキャバレーの外の喫茶店に居るのだが・・・。

オレンジジュースを飲みつつ監視を続けているとターゲットのテロリスト「アル」が店から出てくる。

それに続く形でクーもこっそりと出てきた。

「やはり行動なしか。予定通り10時にレストレンで密会と言うことか・・・」

書類などのやり取りだけなら、レストラン等のほうがかえって怪しまれることは無い。

「巨大テロ組織『赤い満月』のボスカ。一体どんな奴なんだ・・・」

ジュースを啜りながらユウタは手元の資料をパラパラとめくる。

「CICの記録では『赤い満月』についての正確な記録は無い。だが、世界各国で大きなテロ事件を起こし続けている。だが、それだけ活発に破壊活動をおきながら組織名以外のほぼ全てが謎。首領もメンバーも規模も――」

（変だな。ここまで証拠が残らないとは。一体どんな手を使って・・・）

思いを巡らせつつユウタは喫茶店を後にしたのだった――

そして時刻は夜の9時半を回る。

ユウタとクーはホテルの部屋から昨夜テロリストが食事をしていたレストランを監視している。

「テーブルの下に盗聴器は仕掛けておいたな？」

「もちろんです」

クーはキャバレーに向かった後、レストランに寄り隙を見てテロリストが取ったであろう予約席の下に盗聴器を仕掛けておいたのだった。

「なんか僕緊張してきました・・・」

クーがギュッと拳を握る。

「大丈夫だ。俺達はプロ、どんな任務でも乗り越えられるさ」

ユウタは緊張で固まっているクーの肩に手を置く。

「僕ちよつとトイレに・・・」

緊張でトイレが近くなっているのだろう。クーがトイレに行く。

「さて、謎のテロ組織『赤い満月』の正体が今明らかになるな」

ユウタが足を組みながら椅子の背もたれに深々と身を沈める。

その後クーが数分で戻ってくる。ユウタは部屋から遠距離カメラでレストランを覗き、クーは盗聴器が拾う音に細心の注意を払っていた。

そしてその時。ことは起こった。

『あ、ボス。わざわざご足労有難うございます』

『ホテルでの優雅な一時は楽しかったかね？』

その声にユウタとクーが顔を見合わせる。

（変だな。どこかで聞いた覚えがある・・・）

その瞬間遠距離カメラに「アル」と接触している人物の顔が映る。

その姿にユウタが驚愕する。

「馬鹿な・・・!!!!・・・USA2のハワード大将じゃないか！」

国際安全保障軍(Universal Safety assurance army)は国際間の利害に囚われず主に各国の大規模なテロ事件に介入・鎮圧をすることの出来る軍である。

内政干渉に束縛されることなく動けるため、一種の超法規的な軍として認知されている。

軍一つが大きな国際企業のようになっており、各国間を自由に動ける。その自由度の高さからこれまで幾多の巨大なテロ事件を鎮圧してきた実績を持つ。

そしてその軍を動かすトップの一人がジャック・ハワード大将なのである。

声に聞き覚えがあるのは当然だ。CIC軍とUSA2との合同訓練の時に演説していたのを聞き覚えていたのだから。

「そんな・・・何故USA2のトップがテロリストと・・・!？」

クーも驚きを隠せない。

『大尉から預かったサンプルを渡してくれんかね? USA2の基地で彼から預かったはずだ』

落ち着いた深い声が聞こえる。

『これです』

『これがサンプルか。モンスターボールに入っているのだな。【スキエンティア】の技術の賜物だ・・・』

「サンプル・・・何のだ？ ウイルスか何かか？ いや、だがモンスターボールとか言ってた・・・？ それに謎のキーワード【スキエンティア】とは・・・？」

『赤い満月は今度また活動をする予定です。そちらの援助を望みます』

『もちろんだ。可能な限り協力しよう』

（・・・！こいつはとんでもない事態だぞ！まさか対テロ戦を掲げるUSA2とテロリスト集団がつながっているとは・・・！）

『では、私はこれで』

ハワード大将が席を立つ音が聞こえる。

ユウタはパチンと装置を切る。

「少尉・・・！」

「ああ、軍がテロリストとつながっていたんだ」

その時ユウタの頭に何かが閃く。

「もしかして・・・そうか、そうだったのか！ 全て説明がつく！ 軍とテロリストがつながる理由も！」

殆ど叫びに近い声を上げるユウタ。

「あの・・・？何か思いついたんですか？」

クーの問いにも答えず、部屋を歩き回るユウタ。

「・・・だがテロ活動の細かな資料が無ければ俺の推論は証明できない。C I Cには無いし・・・あいつなら、手に入れられるかもしれない。クー！」

「は、はい！」

「ポケモンハンタージュンに関する資料ファイルを開けろ」

「了解」

クーが急いでC I C専用ノートパソコンを空け、C I Cの資料に接続する

「ポケモンハンター、ジュンで検索と」

次の瞬間画面が切り替わり、ジュンの顔写真と細かい経歴が現れる。

「この人、前に研究所近くで会った・・・ポケモンハンターだったんですか？」

「ああ、お前には話してなかったな。こいつは俺がハンターとして潜入してた時の同期だ。やっぱりな14歳から15歳の夏にかけての一年半・・・記憶どおりだ」

『氷室準 現在16歳 P・H・C所属ポケモンハンター コードネームは「NO・4」

ポケモン初等スクール卒業後、10歳の時からポケモンハンターJの元で訓練を受ける。

14歳の春に育て親他数十名の仲間をある事件で無くし、Jの準備が整うまである施設に入れられる。

その施設は事件で死亡したポケモンハンター「リク」の友人であるテロリスト、コードネーム「クロウ」が運営するテロリスト養成施設である。

「クロウ」との関係は良好で現在もたびたび接触している。

施設で一年半過ごした後は際立ったテロ活動は行わず、ポケモン売買を主として活動中』

「・・・テロリストに育てられたんですか!? 彼・・・!」

クーが驚いたように言う。

「ああ。俺は潜入先の人物は全て調べておく性質でな。まあ初めてジュンに声をかけられたときは正直身構えたが」

「で、彼に何を・・・?」

「あいつなら・・・テロリストに太いパイプを持つあいつなら細かな資料を調べられるはずだ。確か「クロウ」は『赤い満月』の分派組織のトップのはずだ」

ユウタは電話を取りジュンの携帯にかける。

しばらくして。

『もしもし』

「俺だ」

『ああ、ユウタか？どうしたの、こんな遅くに？』

ジュンは些か驚いたような声を上げる。

「お前に調べて欲しいことがある。俺の任務についてだが」

その言葉に電話の向こうでジュンが面白そうに笑うのが分かる。

『へえ、民間人の僕に君がね・・・話を聞こうか？』

「『赤い満月』の詳細な活動記録の資料が欲しい」

ジュンが息を呑む。少し緊張した声になる。

『冗談キツイよ。僕はテロリストじゃないんだ・・・手に入れられるわけじゃないじゃないか』

「いや、お前なら出来る。一年半テロ養成施設に居て、『赤い満月』の分派組織の大物テロリストと知り合いのお前ならな。調べられないはずは無い」

しばしの沈黙。ジュンの声が重くなる。少し驚いたような声色だった。

『良く調べたね。そうだよ、僕はポケモンハンターだけど半テロリストさ』

「お前は施設でハッキングと爆弾作りが得意だったらいいな？」

『まったく呆れるよ。よくそこまで、ね』

「俺達はプロだぜ？ 知ろうと思えば冷蔵庫の中から国家機密まで如何なる情報でも手に入るんだよ」

『分かった。『赤い満月』の詳細な活動記録を調べておくよ。その代わり、そっちの情報も渡してね』

「そいつは調べ物がすんでからだな」

ユウタが笑いながら言う。

『了解、少尉殿』

ユウタが電話を切るとクーが寄ってくる。

「驚きました。まさかジュンさんがそこまで真っ黒だったなんて」

テロリストの技術を引き継いでいる少年ポケモンハンターか。

確かに真っ黒だ。

だが・・・。

「あいつは確かに真っ黒で頭も変な方向に切れる。だが一線は越えてない。仲間思いなところがあるからな、俺達には協力してくれるさ」

（ま、悪巧みと少々 of 悪意が体の99パーセントを占めてる奴だが、一応信用は出来る。腕は俺も買っているしな）

「この件は大佐には・・・？」

「俺から報告しておく。ジュンが調べてくれる資料を基に俺の推論が正しいかどうかを判断して、仮説を立ててからになるだろうがな」
ユウタがゆったりとソファに体を埋める。

「なんか、どんどん大変な方向に向かってませんか？」

「今更」

クーがふうとため息をつく。そう、「今更」引き返せない。ここまですく深く関わってしまったからには行くところまで行くしかないのだ。
もう後戻りは出来ないのだから。

「おそらく軍が『赤い満月』のテロを支援している・・・だから証拠が残らなかったんだ」

軍がおそらくテロ活動の証拠隠滅を図っていた。それにテロ組織が到底手に入れないような武器や兵器でも、軍がバックに居れば――

国際安全保障軍（US A 2）とテロリスト集団『赤い満月』。鎮圧する側と破壊する側。守り手と攻め手。

正義と悪。

そう思われていた。俺もそう思っていた。だが……。

俺の考えが正しければ――

この推論に確信を持つには……ジュンの協力が……『赤い満月』の詳細な活動記録が必要だ。

ユウタはゆつくりとその思考を巡らせていったのだった。

第六話 軍とテロリスト（後書き）

今回の話では軍とテロリストがグルになっていたわけですが、自分としてはUSA2が絶対的な悪だとは思いません。だからと言って軍が絶対的な正義であるわけでもない。

組織である限り、必ず矛盾はあります。

テロリスト組織も実際に破壊活動をしている人たちは実は「善意」でやっているのかも知れませんが、軍で戦っている人たちは「正義」だと思ってやっているのでしょう。

自分達を「正義」「善」と思って人を傷つける。傷つける相手を「敵」「悪」「テロリスト」「犯罪者」「退廃者」とレッテルを貼って。

確かにテロリストの手段はあってはならないものです。

しかし過去幾多の戦争を起してきた軍隊組織もとい人間の本质から考えると、実はテロリストのやっていることはそう珍しいものでも無いかと。

ですので、僕は安易に「正義」と「悪」を書き分けません。

コインの裏表であり、どちらも両方に容易に転びます。

悲しいことです。・・・。

第七話 明らかになる真実

ホテル・アレキサンドリア

ユウタは豪華絢爛なホテルの一室のソファに深々と腰をかけていた。

「来たか」

扉が軽い音を立てて開く。

その部屋に入ってくる一人の少年。

氷室準ことジュンは片手を上げて微笑む。

「やあ、少尉殿」

ジュンは軽く手を上げるとユウタの横に座る。

ユウタは横目でジュンを見ると尋ねた。

「どうだ？ 調べはついたか？」

「まあね。あっさり手に入ったよ」

そういうとジュンは鞆から書類ファイルを取り出す。

クリアファイルに入れられた分厚い書類。

「ここに君の望むものがある。ただし、君のほうの情報も渡しても

らおう。等価交換だよ」

その言葉にコクリと頷く。

「了解だ」

ジュンとユウタはお互いに情報を共有しあう。

ジュンは盗聴の録音をユウタは『赤い満月』の活動記録を受け取る。

しばらくして……。

「なるほどね」

「こいつは……」

ジュンとユウタは顔を見合わせる。ジュンは些か面白がっている表情を、ユウタは緊張した表情をしていた。

「君の推論を聞かせてもらおう。先にね」

「俺の考えはな……」

ユウタは重々しく口を開く。

「おそらくUSA2はテロリストと自作自演の戦いをしている」

USA2は各国間の利害に捕らわれず、内政干渉をも受け付けず活動できる軍隊組織だ。

その自由度の高さにより幾多のテロ事件を解決に導いてきた。その勇士は一般にも知られている。

今やU S A 2の権力は肥大し、一個の軍隊組織が持つにはあまりにも大きくなっている。

各国に大きな影響力を持ち、武器開発産業の大きな一角を占める。

その権勢はもはや大国に匹敵するほどだ。

だが・・・その権力基盤は以外に脆い。

軍隊組織全てに言える事だが、軍が輝きを増すのは「敵」が存在するときである。

戦いがあってこそその軍隊であり、世界が本当に平和になったとき軍は事実上必要ではなくなる。

軍隊は平和維持のために存在している。

武装によって支えられている偽りの平和だとしても、世界から争いが消えてしまえば軍の役割もなくなってしまう。

U S A 2の権力は必然的にテロリストが必要となるのである。

テロリストという「敵」が存在してこそ、U S A 2の権力は保たれる。戦うべき敵が居る限り、権力体制は崩れない。

「ジュン、お前が調べてくれた資料から俺の推論に確信が出た」

U S A 2は自分たちの力を維持するためにテロリストと協力関係にある。

この考えが出た時、自分がどうかしたのかと思った。

だが全て説明がつく。自分の情報とジュンの資料によって証拠は揃った。

「この資料からわかったことがある。U S A 2はテロリストを使って自分たちに反抗している国を攻撃していたんだ」

ユウタの確信は揺るがない。

U S A 2の存在を快く思わない国は結構多い。内政干渉を平気で行ってくるのだから当然だ

そこでU S A 2はテロリストと協力し、その否定的立場の国で大規模なテロ活動を発生させた。

そしてその国に甚大なダメージを与えた後、U S A 2がテロリストを「鎮圧」する。

そうすれば、U S A 2は自分たちに反対する国にダメージを与えると同時に、その国の世論を操れる。

即ち「U S A 2は平和を守る存在である」という風潮をその国に広げ、反対論を一掃できるのだ。

どんな人も自分たちを命を賭けて守ってくれた存在には感謝するものだ。

現場の兵士達は本当に命を賭けて人々と平和を守るために戦っている。ただ「戦い」自体が仕組まれた悲劇であり喜劇ですらあるというだけで……。

その姿に偽りは無い。だからこそ強力な世論操作になるのだ。

戦場の兵士達の奮闘とテロリスト達の凶悪さ。それらを見せ付けられれば誰だってU S A 2に賛同する。

そうなれば世論の操作に加え以後その国に対するU S A 2の影響力は決定的に高まる。

あの資料から読み取れたことは二つ。

ひとつはU S A 2が結果的に利益を得るようにテロリストを動かしていたこと。

それと前述した反U S A 2国家に対するテロリストを使用した攻撃と、世論操作による反U S A 2論の一掃。自分たちに反抗する国を戦場にして、その国の力を削ぎつつその国の世論を自らの味方につけ影響力の強化を図る。

これがU S A 2が「正義」を掲げてテロと対峙してきた数々の戦歴の裏側である。

そしてこれはテロリストにとっても有利なのだ。

テロリストの目的は破壊活動を通して自分たちの意見を世間にアピールすることである。

だが、テロリストが手に入れられる武器には限りがあるし大規模な活動は実行すること自体が難しい。

しかし、軍が接触的に協力してくれるなら……。

普通なら手に入らないような武器や兵器が手に入り、軍の手引きで大規模なテロ活動をするのは容易になる。

USA2は自身の権力基盤にテロリストを必要とし、テロリストは破壊活動のために軍を利用する。

相反する二つの関係は互いに互いを必要としているのだ。

何と言う悲劇だろうか。

「ただ引っかかるのが、【スキエンティア】という謎のワードだ」

ユウタは独り言のようにつぶやく。

大尉から預かったモンスターボール……いったい何が隠れている？

「ねえ、ユウタ。もしかしてこの【スキエンティア】って……エリカの組織じゃないの？」

ジyunが思いついたように言う。

「何故そう言える？」

「スキエンティア・・ラテン語で“知識”という意味さ。いかにもエリカが好みそうな単語だよ。それにこの「サンプルの入ったモン

スターボール」というのは正しくは“キメラポケモン”のサンプルじゃないかな？」

そうか・・・！

モンスターボールは誰もが持っている物。

キメラポケモンの持ち運びなら確かにモンスターボールが有利だ。

あまりにも生活に馴染んでいるが故に誰も疑おうとも思わない。

待てよ・・・。

ユウタは再度盗聴した録音を聞く。

この大尉とは・・・まさか・・・。

“上層部ではないが、幹部的な地位でそれなりの影響力を持つ者”

ユウタは急いである人物の活動記録を調べる。

(頼む・・・俺の・・・思い過ごしであってくれ・・・！)

『レオン・J・ホーガン大尉。三日前にUSA2基地に移動』

まさか隊長が・・・。

だが疑わしきものは徹底的に疑え、が俺の信条だ・・・。

たとえばそれが俺にとって好ましくない結果になっても・・・！

ユウタは込み上げる感情をグッと堪えノートパソコンをパタンと閉じる。

「これは僕の推論だけど、おそらくエリカはP・H・CとCICを潰した後、この組織―USA2と商売をしようとしているんだと思う。・・・キメラポケモンを使って」

ジュンが足を組みながらゆっくりと語る。

「この盗聴記録でテロリストが発言してるだろ。これから自分たちは大きなテロ事件を起こすから支援してくれて。僕の予想だけど、おそらくUSA2は今度のテロとの「戦い」でキメラポケモンを実戦投入するつもりだと思う」

しばし頭が真っ白になるユウタ。

次第にその言葉が頭にしみこんでくる。

キメラポケモンを実戦投入・・・？

「馬鹿な・・・」

「この時期にエリカがP・H・C潰しを企てたのがその証拠さ。USA2とテロリストは今度はまた別の国で大規模なテロ事件を起こそうとしている。・・・彼らとしては新兵器を早く使いたいんじゃないかな。誰だって手にれた力を使ってみたいものさ」

そんな・・・ことが・・・許されていていい訳が無い！！！！

ユウタはいつの間にかソファにつめを食い込ませていた。

「全て辻褄が合うんだ。エリカが開発したキメラをUSA2が使い、莫大な利益をエリカが受け取る。その利潤を使ってエリカは自分の研究を続行し、USA2は更なる強さのキメラを求めるって寸法さ」

P・H・CとCICが支援し、開発を手助けたキメラポケモンが今度はUSA2の手によって戦争の道具にされようとしている。

そしてその後ろで糸を引くのは……白衣の悪魔。

大企業と軍をも操り、彼らを全員欺く少女。

人やポケモンの根源的な力への欲求を利用し、ことをここまで大きくし自らの計画を進めてきた驚異的な頭脳と手腕。

まさに「悪魔」に相応しい。

「その推論が本当なら……兎にも角にもまずはエリカ一派を潰さなきゃいけないな。キメラ技術をここで断ち切る」

「……君たちが支援した技術を今度は君たち自身の手で断ち切るわけね」

ボソリと呟かれた言葉。

この状況であつても皮肉な笑みを浮かべるジュン。面白いものを見る顔をしている。

「じゃあまずCIC本部に帰らなきゃな」

話を逸らすとユウタが立ち上がる。

覚悟の決まった表情のユウタにジュンがなんとも言えない表情を浮かべている。

（俺は絶対U S A 2の陰謀を断ち切ってみせる．．．．．）

エリカがU S A 2の陰に潜んでいるかは分からない。もしかしたらこの推論は全てはずれかもしれない。

証拠は無いからだ。

だがユウタは確実に今回の事件の裏に狂気と欲望を手に暗躍する少女の姿を見た。

白衣を羽織り、氷の微笑を浮かべる科学者の姿を．．．。

第七話 明らかになる真実（後書き）

今回の話は特に力を入れました。

ポケハンから受け継いだ謎をこちらで解明したからです。

ですので・・・ぜひとも感想をお聞かせ願いたいです！

ポケハンとイプシロンの同時進行で遂に明らかになっていく陰謀・・・。

どうでしたか？

第八話 動き出す情報部（前書き）

今回は少しギャグ路線です。

新キャラが出てきましたよ〜

第八話 動き出す情報部

「そう言えばクー君は？」

ジュンが思いついたように尋ねる。

「先に本部に返しておいた」

ジュンがよいしょ、とソファから立ち上がる。

「そう・・・じゃあ僕のキメラ能力で帰ろうか？」

（ん・・・？今・・・なんだった？）

肩眉をピクリと上げるユウタ。怪訝そうな表情だ。

「ワームホール」

ジュンが手をかざすとブウン、と機械音がしてなんとホテルの部屋に黒い穴が開いた。

「え・・・な・・・これは・・・」

驚きのあまり声を失うユウタ。

「言ったでしょ。僕はエリカによってキメラ化されたと。僕の中には空間をつ司る神、パルキアの力の一部が存在しているんだよ」

ジュンが何でもないように説明する。

しばらくポカンとしていたユウタだったがやがて口を開く。

「すごいぜ！こいつを使えばUSA2の基地にだって」

「それは無理だ」

ユウタの言葉を遮り、ジュンがあっさりと言う。

「何だよ!？」

「僕の空間移動能力を阻むフィールドが全USA2基地の周囲に存在している。・・・おそらくエリカがやったんだ」

「くそ」

短く舌打ちをする。

「さ、行こうか」

ジュンが微笑みながら黒い穴に入り、ユウタを手招きする。空間にポツカリ空いた穴は直径2メートル近くで、中は真っ黒で見えない。ジュン連れられユウタが穴に入る。

「うああ・・・」

驚きの声しか出ない。ワームホールの中からは部屋の景色が歪んで見えた。

ベッドや家具、インテリアがまるでコーヒーに入れたクリームが渦

を描くように、ウニヨウニヨとして見える。

「結構圧巻だろ？ここからの眺めは」

歪んだ景色のトンネルの中を進んでいくジュンとユウタ。

渦巻く景色。外に見えているのは多分人やポケモンだろう。

“多分”というのはそれらの姿が歪んで見えるから判断がつき難いのだ。

しかも時間感覚が外の世界とまるで違う。

少ししか歩いていないのに数時間歩いたような感覚だ。

「俺達は一体何時間ここに居るんだ？」

「まだ一分程度しかないよ」

ジュンがケラケラ笑う。

歪んだ光景と時間感覚の狂いにユウタが立ちくらむ。

「吐きそうだ・・・」

「慣れるまではね。僕達は今光の速さより早い速度で移動しているんだ・・・当たり前さ。さ・・・着くよ」

「ちょっと待て、C I Cのどこの部屋に着くんだ!？」

もし人が居るところに出てしまったら・・・。

「あ、ごめん。僕 능력はその到着点の詳細な地理情報が頭に入っていないと微調整できないんだよね」

頭を掻きながら言うジュン。

その言葉にユウタが青くなる。

「もし更衣室にでも入っちゃったら・・・」

「それはその時。よし、開けワームホール」

ジュンが手をかざし、出口を作る。

(こうなりや自棄だ！)

ジュンとユウタはワームホールから飛び出す。

飛び出した先は――

「しょ・・・少尉！？なんでここに、というかどこから!？」

クーが体を拭くタオルをバサリと落とす。

CICの男性隊員達専用の浴場だった――

「い・・・イプシロン少尉が何故ここに・・・？」

「どこから出てきたんだ？」

「つーか、もう一人の少年はいったい誰だ・・・？」

どうやら情報部と陸軍の入浴タイムであつたらしく辺りが騒然とする。

「えっとだな・・・これは・・・その」

流石に動揺しているのかユウタの目が泳ぎ、口ごもる。

騒然とする裸の隊員達。動揺するユウタ。

しかしその中でいて平然としている奴が一人。

「皆さん、落ち着いてください。彼は僕と一緒に時空間移動をして来ただけです。手違いでここに現れてしまっただけのことなのです」

浴室にジュンの声が響く。

その言葉にC I Cの陸軍サイドの兵士達がヤジを飛ばす。

情報部の部員達は風呂につかり成り行きを眺めていた。

「ちょ・・・時空間移動だぁ！？」

「信じられるか！」

「ちゃんと説明しろ！」

「少尉も何か言ったらどうですか！」

沸き起こる隊員達の大ブーイング。

ジュンはその様子にため息をつくと首をふりふりバッグからVZ61「スコープオン」を隊員達に向ける。

普段から厳しい訓練で鍛え抜かれた隊員達だが、ここは浴場。銃どころか服すら存在しない姿は銃の前には無力だった。

隊員達が後ずさりする。

「もう一度言います。僕たちは空間移動に失敗してここにいるのです」

「そんなこと・・・」

隊員達の一人が抗議の声を上げかけるが――

タタタタタ

軽い銃声と共にVZ61の銃口から弾丸が連射される。

弾丸はその隊員の足元のタイルにのめり込む。

「ちょ・・・ま・・・待て・・・待ってくれ」

その隊員が尻餅をつく。顔はすっかり青ざめてしまっている。

「亜空間移動の失敗でここいる。それでいいですね？」

笑顔でV Z 6 1を隊員達に突きつける。

コクコクとただ頷く隊員達。

「よろしい。あ、それとこのことは口外しないでくださいね。口が軽い方はスコーピオンに食べられちゃいますよ」

タン、と一発天井に撃つと固まっているユウタを引きずりジュンは浴場を後にしようとする。

が、気が変わったようできると振り向くと言った。

「すっかり汗かいちゃったから、風呂に入ってから外に出ようか」

服を脱いで外の籠にしまうと、ジュンとユウタが浴場に浸かる。

すると石のようになっていいるユウタに近寄るポケモンあり。

「少尉くお久しぶりです!」

真っ赤な羽毛とオレンジ色の羽毛が混ざり合った色の体。

V字型の鶏冠。身長は190センチの人型のポケモン、バシャーモだ。

「フアオか」

このバシャーモはクーと同じくC I C情報部の部員であり、階級は曹長。

コードネームは「V」^{ファオ}

陸軍の突入部隊出で、長身を生かし接近戦に滅法強く情報部員としても優秀である。

正義漢で性格も明るく、好戦的な所が情報部員としては玉に傷だがその他は文句のつけようが無い。

だがこのバシャーモ、ファオ曹長には大きな難点（とユウタは思っている）がある。

・・・・・・男色家なのだ。

新部員や他の隊員達で見場が良いのがあるとそれが人間であってもポケモンであっても口説きにかかってしまう。

またユウタに惚れており、そのことがユウタの悩みの種になっている。

「少尉、お背中お流します！」

じりじりと近寄ってくるファオ。獲物を狙う目になっている。

「心遣いは有難いが自分でできる」

ユウタはスススと風呂の端まで移動する。

「えゝそんなに俺を避けなくても良いじゃないですかあ」

「お前はよからぬことばかり考えているからな・・・・あ、こいつ

を紹介しておこう」

言いつつユウタはジュンの後ろに隠れる。

「こいつは氷室準、まあ俺の知り合いだ」

「こんにちは、ファオさん」

ジュンが手を出す。

「ちわっす！俺、バシャーモのファオ曹長です！」

ファオも三つ指でジュンの手を握り、握手をする。

しばらくするとファオがジュンを品定めするように見る。

「……何か？」

「顔は良いけど、もうちょっとガッチリしてるほうが良いかも……でも、まあいい感じ。ねえ、君」

ファオがジュンの肩に手を回してくる。

その様子に只ならぬ気配を感じたのか、ジュンが身構える。

「俺と付き合わない？」

「……っ！」

ジュンがファオを振り払うと、ユウタの横まで避難する。吃驚した

のとゾツとしたので鳥肌が立っている。

「気をつけろ、ファオはホモだ。気を抜くと食われるぞ」

「俺は手荒なことはしないよ。ただゆっくりと抱きしめるだけで・・」

言葉尻が怪しい吐息と混じる。

「ちょ・・・ファオ、止めようよ。ここ浴場だよ」

見かねたクーが止めに入る。

「えゝ」

文句を言いつつファオが湯船から上がる。何度か名残惜しそうにチラチラと振り返っていたが、そのまま風呂場から出て行った。

その後ジュンとユウタは浴場で一風呂浴び、ジュンが携帯で隊員の一人の素っ裸の写真を撮った後、「着替え持ってきてください。じゃないとこの写真をコピーしてばら撒きますよ」と脅迫し着替えを入手。

おびえる隊員達を尻目に浴場を出たのだった。

風呂から上がった後情報部に向かった。

途中ファオが「濡れそぼった少尉もゾクゾクするほどセクシーです

ねえ」と言い絡んできたが無視した。

「で、これが俺の推論だ」

C I C 情報部に戻ったユウタが大佐以下全員に話す。

ただエリカ一派が関っているかもしれないことは話していない。あくまで U S A 2 が『赤い満月』と組んで自らの権力維持と補強の為にテロ行為を誘発し、自作自演の戦いをしていたところまでだ。

「こいつがその証拠」

バサリと書類を机に置く。

場の皆は黙りこくっている。

「イプシロン君・・・どうやら君はかなりの大事を掘り当てたようだね」

ロス大佐が深いため息をつく。

「なんということでしょうか・・・」

クーが悲しそうに顔を伏せる。

「くそ、あいつら」

軍服姿のファオも拳をギュツと握っている。

「この情報にはまだ決定的な証拠は無いですが・・・C I C 情報部

が結束して調べれば掴めるかも知れません」

大佐のほうを向きながら真摯な目で語る。

「よし、上層部には私から話をつけておく。……USA2の陰謀を何としても暴くぞ！」

「ええ」

「了解です」

「おっしゃ！」

司令塔ロス大佐の下にCICが一つになる。

「ところでこの重要情報を入手したイプシロン君には栄誉が必要だな」

ロス大佐が満足そうに言う。

「大佐、この情報を掴めたのはクーの働きもあります。彼のことも評価に入れるべきです」

「もちろんだとも！」

情報部一同の視線がユウタとクーに集まる。

クーは手を頭の後ろにやりながら照れたような表情になる。

「そんな……」

湧き上がる皆を黙って見ていたジュンだったが、ポツリと呟いた。

燃え上がる炎に冷水を被せるような・・・その言葉には少々の意地悪が込められていた。

「ホテルの新婚用のスイートルームで情報伝達も早まったんだろ
うねえ」

その言葉に皆が固まる。

「ジュ・・・ジュン！余計な事を・・・！」

ユウタの顔が真っ赤になる。

「あ、ごめんね。でも真実でしょ」

ジュンが意地悪く微笑む。

「少尉・・・君にその性癖があるとは・・・いやはや人とは分からないものだ」

ロス大佐が世界七不思議を見るような目でユウタを見る。

情報部員達も驚きの表情だ。

「ち・・・違う！他の部屋が一杯で・・・なあクー！そうだよな！？」

「え、ええ！僕たちは一緒に寝ただけで、何もやましいことは・・・」

ユウタとクーが必死に弁解する中、ファオがユウタに近寄る。

「少尉、酷いじゃないですか！」

ユウタに詰め寄るファオ。身を引くユウタ。

「あなたは俺の思いを知りつつ・・・寄りによって准尉なんかと！」

「だから違うと言ってるだろうが！！！」

叫び声に近い音量で言い返すユウタ。

その迫力にファオが一瞬一步引く。

「・・・本当ですか？本当に・・・クー准尉とは何も無かったんですか・・・？」

「テメエ何年ホモやってんだ・・・？」

顔を手のひらに埋めながら静かに尋ねる。

怒りで声が震えている。

「俺がホモか、ホモでないか、見分けがつかねえほど無能なホモなのかテメエは！？そんな男色趣味なら止めてしまえ！！！！！」

情報部に響き渡る怒号。

「その通りですけど、恋は盲目ですよ。それにしても准尉が羨まし

い・・・俺だったらチャンスは逃さないのに・・・」

ファオが微笑みながら返す。言葉には羨望が混じっていた。

「・・・・・・・・もういい！」

ユウタは笑いを堪えている情報部員たちの方に向き直る。

その鬼の一睨みで一瞬で静かになった。

「USA2の内部事情を徹底的に調べろ！決定的な証拠を掴め！ヘマをやったら分かってるな！？」

いつにも増して激しい命令口調に部員達は逃げるように・・・そして固い意志のこもった目で部屋から出て行く。

ユウタを含め彼らは今から強大な陰謀を暴くべくUSA2を探りに行くのだ――

第八話 動き出す情報部（後書き）

次回はUSA2との戦いが始まりそうです。

ポケハンのほうでも動きがありますよ

第九話 昇進（前書き）

今回は短いです。

第九話 昇進

ユウタ達は会議終了後、本部の休憩室に集まっていた。

情報部の部屋に近いため部員がよく利用する場所である。

ファオが全員の缶ジュースやビールを自動販売機で買う。

「いやゝ少尉、大変なになりましたね」

ファオ曹長が缶ビールを飲みながらため息をつく。

「本当ですわ」

イクス准尉がソファの肘掛に腰をかける。その横にはクーも座っていた。

「トワイライト作戦かぁ・・・大変なことになりそうだなあ」

クー准尉も首を横に振る。

「お前達、そんなことでどうする！俺達は実行工作員として選ばれたんだ！もっとシャキツとしろ！」

ユウタの一喝。情報部を最年少ながら率いているだけ合って声に張り威厳がある。

「その通りですね！さすが少尉！俺の惚れた男です！」

ファオがビールを片手にユウタに近づいてくる。既に吐息には荒ぶる感情が混じっていた。

廊下を通りかかる人やポケモン、それにクー達も「またか」という表情になる。

「・・・そういうことを公言するな」

「いいじゃないですか。もう皆知ってますよ。俺はいつでもOKなんですよ！そろそろ俺と付き合ってくださいよ」

「断る！」

ファオがユウタにジリジリ近寄り、ユウタがそれを避ける。

がファオはそのユウタの行動さえも感じる場所があるらしく、ますます微笑んだ。

ファオの言うとおり、彼がユウタに惚れているのは軍内部のほぼ全員が知っていることだった。

ユウタにことあるごとに接近し、その度に完膚なきまでに拒絶されているも懲りずに繰り返す。

この見慣れた光景にクーもイクスもため息をつくだけだった。

「ファオ曹長、軍内部でそういう行動をとるのは止めたまえ。発情するのはプライベートだけにすることだ」

そんな中歩いてきたのはイーブイのブラウン少将だった。上半身に

だけ特注の軍服を着ている。

廊下を行きかう兵士達は皆立ち止まり敬礼している。

「少将、何か御用ですか？」

イクスが尋ねる。

「いや、私も少し休憩をしようと思ってな」

ブラウン少将はソファの上に飛び乗る。

「すまんがコーヒーを私の代わりに自動販売機で買ってくれんか？
金は後で立て替える。ブラック加糖で頼む」

ブラウン少将はイーブイ故、自動販売機に背が届かないのだ。

というか軍内部の殆どの設備に背が届かない。小さいポケモンの宿命だ。

クーがコーヒーを買うと、ブラウン少将に渡す。

少将は缶コーヒーのプルを前足の爪で器用に向け、コーヒーを飲む。

「これから忙しくなりますわね」

イクス准尉の言葉にブラウン少将が頷く。

「ああ、本当に忙しくなる。何せ相手は世界に名だたるUSA2だ。
だが、私は君達を信じているぞ。上手くなってくれるとな」

「絶対に期待に伝えてみせますよ！少将！」

ファオが元気よく言う。

「頼もしいことだな」

ブラウン少将もふっと笑う。

「さてと、君達も今のうちに休んでおけ。トワイライト作戦が始まれば、休む暇など無いからな」

コーヒーの飲み終わるとソファから飛び降りるブラウン少将。

コーヒーの空き缶をゴミ箱に入れると歩いて行った。

「あ、お金立て替えてもらうの忘れた・・・」

クーが思い出したように呟いたのだった

すると少将がUターンしてきた。

（あ、お金払ってくれるんだ。よかった）

しかしクーの思いも虚しく、少将はユウタの前に行く。

「来たまえ、イプシロン少尉。君に話がある」

「はっ」

ブラウン少将はファオ達をその場に残し、ユウタと共に歩く。

暫らく黙って歩いていたが、ユウタが口を開く。

「あの・・・お話とは？」

「うむ。君、今日で19歳らしいな」

その言葉にユウタは軽く驚く。

（俺の誕生日まで把握してるのか・・・さすが少将）

「はい」

「君はUSA2の陰謀とエリカの計画の大半を解き明かした。まだ若年とは言え、君にはすばらしい能力がある。その実績を評して、君を昇進させる」

その言葉にしばしポカンとするユウタ。

「それは・・・俺を・・・」

「君は今日からイプシロン“中尉”だ」

（俺が・・・中尉？）

「しかし、俺はまだ未成年で・・・その資格があるかどうか・・・」

「謙遜はしなくていい。私の判断だ。未成年だろうが君には力がある。それに過去の実績の積み重ねも存在するしな。これから頑張る」

りたまえ、イプシロン中尉」

「有難うございます」

ユウタが敬礼をするとブラウン少将は軽く微笑む。

「君には期待している。C I C情報部を率いて行ってくれ。まあ、変り種ばかりだから苦労は絶えんとおもうがな」

「いいえ、部員達は全員優秀ですよ。些か変わり者が多いですが・・・」

優しく些かびびりなクー准尉

勇敢だが男色家のファオ曹長

潜入能力に優れるがイケメン大好きなイクス准尉

確かに皆少し変わっている。

「まったくだ」

ブラウン少将は快活に笑う。

「・・・しかしそう言う君も変り種だよ、イプシロン君。君のような過激な奴はそうは居らん」

「ではこれから自重します」

「いや、君の持ち味はその“過激”さだ。存分に生かしたまえ」

そう言うブラウン少将はエレベーターに乗る。

それを見届けた後ユウタは休憩室に戻った。

休憩室にはまだイクス達が座って談笑していた。

「あ、少尉！どんな話をしてたんです？」

クーが尋ねる

「ん・・・あれだ。今日から俺は中尉になったからよろしく」

その言葉にクーとイクスとファオが顔を見合わせる。

「おお！昇進なされたんですね！凄いですよ！」

「それは絶対お祝いしなきゃいけませんわ！」

「流石です！じゃ、お祝いに今日俺んちに泊まってくださいよ！」

一人（一匹か）怪しい言動を祝辞に織り交ぜている奴がいるが、ユウタはそれを微笑みスルーする。

「クー准尉、イクス准尉、ファオ曹長。これからよろしくな」

「」「こちらこそ、イプシロン中尉！」「」

ユウタは三人と互いに握手を交わす。

その夜。

ユウタはクーの家に集まっていた。

まあ身内のパーティだ。

内容はもちろんユウタの昇進について。

「中尉、おにぎりできましたわ！」

イクスがおにぎりの乗った大皿をテーブルに置く。

「これ木の実のソテーです」

クーも笑顔で木の実ソテーの乗った皿を四枚テーブルに置いていく。

「中尉、夜は俺と一緒に寝ましょうね」

ファオが怪しげな言動を混ぜつつ、お茶を置いていく。

「皆、有難う」

ユウタが少し照れながら言う。ファオが笑う。

「少・中尉は俺達の直接の上官なんですから当然ですよ」

「その通りですわ。私達は貴方を尊敬しているのですから」

「僕たちはずっとついて行きます」

三人は満面の笑みを湛える。

その様子ユウタもニツと笑ったのだった。

それから数日。

偽造IDカードを製作し終わったのがユウタ達に告げられた。

これでUSA2への潜入手段の確保が完了したわけだ。

その日ユウタ達とジュン達はCIC本部の訓練施設に呼び出された。

「ではこれよりトワイライト作戦を実行に移す」

例に漏れずジュンに抱かれたままブラウン少将が話し出す

。今日は軍服を着用している。と言ってもイーブイの体に合わせた上半身だけのものだが。

また軍の帽子を被っているため耳は押されて横にたれている。

「作戦内容をお浸いすると、まず君達はUSA2の物資輸送の軍用トラックを強奪。USA2の軍服に着替えた後、検問所を通過。その後偽造IDカードを使用し、基地内部に潜入する。その後ジュン君はメインコンピュータ室にてハッキングを。イプシロン中尉率いるグループは施設等に爆弾を設置。設置後、中尉達は直ちに基地外部に出て、ジュン君は爆弾起爆後、中尉達と合流する」

「そして避難して来たエリカ達を待ち伏せし、キメラのデータを破壊する……ですね」

ファオ曹長の言葉にブラウン少将が頷く。

「その通りだ。では諸君らの活躍に期待する！」

皆が頷く。

「私は情報部を本作戦の本部とし、君達の行動を見守る。では後顧の憂い無く励みたまえ！」

「了解！」

今ここにトワイライト作戦が始まったのだった。

第九話 昇進（後書き）

と言うことでユウタことイプシロン少尉は中尉にレベル・アップしました！

おめでとう ユウタはちゅういにしんかした！

イクス「何のポケモンですか（汗）」

クー「あのお僕の昇進は？」

ブラウン「君は無しだ」

クー「そんなあ！」

いやあしかし今回は間の話ということでだいぶ短いです

ユウタ「ホント短いな」

次回はこちらかポケハンで

では♪

第十話 トワイライト作戦開始 準備される破壊工作

「ジュンはまだか？」

ここはU S A 2基地に通ずる道の脇。

木々の生い茂る茂みだ。

ユウタ達はここで作戦実行のために集まることになったのだ。

今回のメインであるジュンの準備が出来次第U S A 2基地に向かう手はずなのだが・・・。

なかなか来ないのである。

「まったく遅いぜ」

ユウタがイライラしているよこでファオがそわそわとしている。

それに気づいたイクスがファオに声をかける。

「どうしましたの？」

「いや・・・ちょっとトイレ行きたいなあ・・・と」

「じゃさっさ行って来い」

どうやら緊張でトイレが近くなっていたようだ。

ファオがその場を離れると、こっそりとクーも後続く。どうやら彼も我慢していたらしい。

「ったく、あいつ等。トイレぐらい行っとけよな」

ため息をつくユウタ。この調子で本当に大丈夫かと思い始めていた。

「なんだ〜准尉も我慢してたんですね」

ファオがクーの横を歩きながら言う。

「まあ、あの状況で一人でトイレはちょっと・・・ファオが居てくれて助かったよ」

二人は今身近な場所をさがしているのだ。

「ここらだと人目もないしいいんじゃないですか？」

「そうだね・・・立ちションしてるところは見られたくないし」

二人が並び用を足し始めた瞬間。

「あら、おトイレ中かしら」

後ろから声がする。聞く限りでは少女の声。

二人が恐る恐る後ろを振り向くとそこには青いワンピースを着た少女が腕を組んでいた。

麦藁帽子を深々と被っている。

一瞬でファオとクーの顔が真っ赤になる。

今は用を足している最中。隠すことも出来なければ、ここから逃げ出すことも出来ない。

一番人に・・・特に女性には見られたくない光景だろう。何せ間拔けな姿だ。

少女は薄っすらと微笑みながら背中越しに覗き込んでくる。

「あの・・・あまり見ないでもらいたんだけど・・・」

クーが顔から湯気が噴出しそうなほど真っ赤になっている。

「あはは、やっぱり恥ずかしいよねえ。女の子に覗かれるのは」

急に少女の声のトーンが変わる。まるで少年のような。

クーとファオがよく見ると、その顔には見覚えがあった。

「もしかして、ジュン君？」

クーの問いに、その少女・・・に扮したジュンが頷く。

「青いワンピースの美少女ですわよ♪」

ジュンはそう言うとかるりと回る。ワンピースが涼しげだ。

「ちょ、女装かよ・・・驚かせるなよな」

ファオがため息をついてチャックを上げる。

「ホント。一瞬恥ずかしさのあまり憤死しそうになった」

クーもやれやれと首を振る。

「君達をからかうためにわざわざこの場面に出てきたんじゃないか」

「今のは面白かったっすよ」

ジュンの後ろからアルも出てくる。

「それでもなあ！」

ファオが抗議しようとするが、ジュンは唇に指を当てつつ言う。

「先に手を洗ったら？」

その後、ジュンとクーとファオはユウタ達の待っている場所まで戻る。

クーがジュンの姿をチラチラと見る。どうやらジュンと分かっている気になるらしい。

「あれ、クーさん。僕のこと気になります？」

「いや・・・そんなことは無いよ」

クーの態度にジュンは笑顔を広げる。

「いやだなあ、僕は男ですよ・・・」

そういつつクーにすつと手を回す。

明らかに心臓がバクバクいつている。緊張している証拠だ。

「もう既に陥落しそうじゃないですか」

「残念ながら僕も軍人。そう簡単には落ちないよ」

そういう残すとクーはさっさと歩いていつてしまった。

「素直じゃないなあ」

クスクス笑うジュン。

ファオとアルはため息をつくジュンの後を追っていった。

「遅せえ・・・一体いつまでトイレに遠征してんだ！あいつらは！」

その頃ユウタは苛立ちながらクー達の帰りを待っていた。

イクスは待ち時間を利用してお化粧直しをしている。

その時ガサガサと後ろで音がする。

「遅いぞ！一体トイレにいつまでかかってんだ！？大きいほうは家でしてこ・・・」

目の前に現われたのは青いワンピースに麦わら帽子の少女。

「ユウタ君、お久しぶり」

その少女はにこりと笑う。

「……失礼だが、俺はあんたに見覚えが無いんだが……」

「あら？私よ、私。ユウタ君が散々弄んだ女じゃない」

「俺はお前を知らん！」

ユウタが反論するが横でイクスがジト目でユウタを見る。

「中尉、最低ですね……」

「イクス、俺のことが信じられないのか！？大体俺は女性と一回も付き合ったことが無いんだぞ！」

「君堅物だもんね」

突然少女の声のトーンが少年のそれになる。

その声には聞きおぼえがあった。

「ジュンか……？」

「その通りですよ、中尉。彼はジュン君です」

「俺達も騙されましたよ」

「まあすつごく可愛いつすけどね」

茂みから出てきたクーとファオとアルが声をそろえて言う。

「何故男が女装なんかしてるんだ!？」

「これも僕の作戦だよ」

そういつつジュンは麦藁帽子を深々と被る。どう見ても女の子にしか見えない。

（くそ、女装なんかしゃがって気色悪い! なまじ似合ってるだけ余計いかん!）

ユウタは忌々しげにジュンを一瞥すると戦闘を歩いていく。

暫らく道路に沿って歩いていく。

（そろそろだな・・・）

ユウタは腕時計を見る。ユウタ達のデータではそろそろUSA2の物資輸送トラックが通るはずなのだが・・・。

「あ、来ましたわ」

イクスの言葉通り軍用トラックが遠くから走ってくる。

「さてと、僕の出番だね」

ジュンはそう呟くと道路の真ん中まで歩いていく。

ユウタ達は茂みに隠れ事の成り行きを見ている。

輸送トラックはジュンの姿に気づいたらしくブレーキをかけて停車する。

トラックの中から制服姿の青年が出てくる。おそらくはU S A 2の兵士だろう。

暫らくジュンと兵士は話していたと思ったら、いきなりジュンが銃を突きつける。

その兵士が驚いて居る隙にユウタ達はトラックを強奪したのだった。
・・・

「いやあ、やっぱり男は美人に弱いものだね。はっはっは」

ジュンが輸送トラックの荷台で面白そうに笑う。

今強奪したU S A 2の物資輸送トラックに居る。運転席ではU S A 2の制服に着替えたアルが運転をし、ユウタ達は今後の荷台にいるのだ。

また縄でぐるぐる巻きにされたU S A 2の兵士も無然とした表情で座っている。

「ごめんね、でもこれも任務なんだ」

クーが拘束されている兵士の横に座る。既にジュンも含め全員が持参したU S A 2の軍服を着用している。

「貴方イケメンだけど、これもお仕事なの」

イクスも申し訳なさそうに言う。

「俺にこんなことしてただで済むと思ってんのか・・・」

兵士がユウタ達を睨む。

「いやだなあ、僕を見た瞬間色目使ってたじゃない」

そんなU S A 2兵士の頬にジュンがそっと手を触れる。

「あれはお前が女だと思ったからで―」

「あれ、男だと分かった今でも顔が赤いよ?」

ジュンのクリアな目が兵士を覗き込む。

「う・・・それは・・・」

「やっぱり僕のが気になるんだ」

ジュンはそのまま兵士の肩に手を回し、そのまま自分にだきよせる。

「ねえ、基地のことを教えてよ。君の知ってる範囲でいいからさ。僕が知りたいのはコンピューター室の位置と基地の詳しい情報なん

だけど」

「―っ誰が！」

「僕のお願ひ聞いてもらえないの？」

ジュンの吐息が兵士の首筋に触れる。

「でも・・・」

「お願い」

ジュンの頬が兵士の頬と擦れる。

「・・・・・・基地の二階に基地のマザーコンピューターとつながっているコンピューターが置かれている部屋がある」

兵士の言葉にジュンは微笑んだ。

その笑顔に兵士が熱に浮かされたように顔を赤らめる。

「後基地にはF―15戦闘機が十数台置かれている。俺が知っているのはそれだけだ」

ジュンは笑顔のまま兵士を抱き寄せて耳元で囁く。

「ありがとう」

「・・・・・・おう」

（ジュンの籠絡戦略は凄いな・・・C I Cもあの手の工作員の育成マニュアルを作らなければな）

ぼうつと熱に浮かされたように真っ赤になっている兵士を抱きジュンはその頭を優しく撫でている。

すっかり虜になっているようだ。

その光景にユウタは少しため息をついたのだった。

その後トラックはU S A 2基地についた。

検問所をクリアし基地の駐車場につく。

魂が抜かれたような表情になっている兵士に猿轡をした後その場に残り、ユウタ達はトラックを出た。

「さてここからは俺達とジュンは別行動だ」

ユウタは歩きながら後ろを歩いているジュンに声をかける。

ユウタとクーそしてファオは手にアタッシュケースを持っている。

そのケースの中には高性能のプラスチック爆弾が入っているのだ。

アルの特性爆弾で、C I Cが用意した爆弾をベースに改造したものだ。

そしてアタッシュケースはイクス准尉のサイコパワーで見えなくしている。

イクスのエスパー系能力が潜入に非常に有利に働く理由の一つだ。

「俺達が爆弾を仕掛け終わったらお前の小型コンピュータが反応する。ハッキングで情報を掴んだら、起爆させる」

「了解、中尉殿」

ジュンは微笑むと基地のドアにIDカードを入れ通過する。ユウタ達も偽造カードで次々と基地に入っていく。

「じゃあね。上手くやってよ」

「お前もな」

ジュンが一人階段を上っていく。

「ジュン君は上手くやるっすかね」

アルの問いにユウタが頷く。

「あいつのことだ。ヘマはしないさ。さてと、アル。この基地の施設について教えてくれ」

「そうっすね。俺も何度かしか来たことないんすけど……。まずこの基地の地下一階には自家電力施設があるっす。万が一のことがあってもそこで電力を供給するっすよ」

「なるほどな。爆弾を起爆させるのは証拠のデータを掴んでからだが、エリカ達の研究施設とも連動してる可能性が高い……。そこは

爆破しないほうが無難だな

トワイライト作戦の第二の目的。キメラデータの破壊。そのためにはエリカがキメラのデータをコピーする間コンピューターの電力を落とすわけには行かないのである。

「え、でもキメラデータは結局コンピューターのハードを破壊しないといけないんじゃない？」

クーが小首を傾げるが、ユウタはあっさりと応える。

「コピーじゃないほうのデータはジュンに渡しておいたCIC特性のデータ破壊ウイルスがあるから大丈夫だ・・・他には無いか？」

「あ、他にはっすねー弾薬庫が外あって、後は・・・会議室とか・・・屋上にはヘリポートもあるっす」

「弾薬庫か・・・イクス、お前弾薬庫に爆弾仕掛けろ。お前なら姿をサイコパワーで透明に出来る」

「了解です」

「クー、お前は屋上のヘリポートだ。爆破後にヘリが着陸出来にくいように、それに屋上なら人も居ない」

「分かりました」

「あの・・・俺は？」

「ファオ、お前は俺と一緒に基地の外部の戦闘機の収容場所に行っ

て、戦闘機に爆弾を仕掛ける」

「やった。中尉と一緒にだ！」

ファオが満面の笑みでガッツポーズをとるが、ユウタはそれをスルーする。

「俺はどうするんすか？」

「お前は会議室。机の下に仕掛けろ」

「了解っす！」

ユウタ達も別行動に入る。

イクスは一番警戒が強い弾薬庫、ユウタとファオは戦闘機の収容場所、クーは屋上、アルは会議室。

ユウタとファオは皆と別れた後廊下を進んでいく。

そのまま廊下のドアを開けると見えてきたのは戦闘機の収納庫。

ユウタとファオはこっそりと収納庫に入る。

中には15〜6台の戦闘機、F-15が収納されていた。

だいぶ使われた形跡がある。おそらく空軍のお下がりだろう。

「すげえ……俺もこんなのに乗って大空を飛んでみたいな」

ファオが若干羨ましそうに機体を撫でる。

「無駄口を開かずにさっさと爆弾を仕掛けろ」

ユウタがピシヤリという。

（燃料の直ぐ下につければいいだろ・・・）

カシャンと言う音と共に爆弾を機体の下部にセットする。

「中尉、ほんとにここの全部爆破してしまうんですか・・・なんか勿体無いというか・・・」

ファオの言葉には迷いが込められていた。

空軍が愛機として乗り回した戦闘機をその思いごと叩き壊すことに少し引け目を感じているのだ。

「俺達の任務は破壊工作だ。そんなのいちいち気にしてたら何も出来んさ。ほら爆弾を早くセットしろ」

そう言いつつもユウタもファオの思いに少し共感していた。

（確かにファオの言うとおり・・・俺だって奴らが魂を込めているであらう愛機を無残に破壊したくは無いが・・・）

しかし・・・ユウタの心の中にある思いが芽生える。

残酷なまでの目的意識。

「任務」のためにはいかなる手段を用いてやるという奇妙な決意。

情報部で工作員としてやってきたからであろう。普通の軍人が抱く感情とは異なったものだった。

情報部員、スパイとしての活動は実戦で戦うのとはまた違う。その違いはユウタの心に深い感情を生み出していた。

ユウタとファオは次々に戦闘機の機体に爆弾をつけていく。

（俺達の役目は爆弾の「設置」。起爆させるのはジュンの役目だ―）
十数台の戦闘機の機体下に設置された爆弾の赤いランプがチカチカと点灯する。

ジュンに渡した起爆装置と連動している爆弾のランプは未来の「破壊」を暗示するかのようだった。

第十話 トワイライト作戦開始 準備される破壊工作（後書き）

今回はイクス達の話に触れようと思います。

その次はポケハンでジュンのハッキング&爆弾起爆までです。

第十一話 トワイライト開始 爆弾を設置せよ（前書き）

今回はかなり短いです（汗）

第十一話 トワイライト開始 爆弾を設置せよ

「ほえ〜何度きても慣れ無いっすねえ」

USA2基地に潜入が完了したアルはアタッシュケースを持って歩いている。

途中すれ違う軍人に何度か声をかけられたが「機械の点検で」と言っていた。

（俺は確か会議室に爆弾仕掛けるんだったんすよね・・・）

だが制服を着ているとはいえここは軍の中心部。

テロリストの仲間だったアルには世界で一番来たくない場所のひとつだ。

（やばいっすよ・・・見つかったら即アウトっす・・・）

アルは金髪に染めた髪をバリバリと掻く。

かなり緊張しているらしい。

「あ、ここっすね」

暫らく歩いていると大きな部屋が見えてくる。

「大会議室」と書いてある。

部屋に入ってみると大きな円形テーブルとそれを囲うように椅子が並べられていた。

「さすが軍っすね・・・なかなかゴージャスっす」

ここまで来て緊張が解けたのか、アルは大きくため息をつく椅子に座った。

「さてと、爆弾仕掛けなきやつすね」

カチャリと留め金をはずす。

中に入っていたのは数個の爆弾。

「俺特性のプラスチック爆弾っす♪」

そしてアルが爆弾をケースから出した瞬間、ガラリと扉が開いた。

「まったく緊急会議なんて面倒だよなあ」

「ま、仕方ねえよ。お偉いさん達が言い出したこった」

「さっさと終わりたいぜ」

大会議室に入ってきたのは三人の青年。USA2の軍服を着ていることから軍人であることが分かる。

また階級章から右から順に「中尉」「准尉」「軍曹」ということも分かった。

アルと三人の隊員の目が合う。

一瞬の静寂。

「・・・誰？」

軍曹の隊員が怪訝そうな顔をする。

「いや、俺は・・・」

「おい、こいつの手にあるのって・・・爆弾じゃねえか!？」

准尉の隊員がアルを指差す。

と同時に中尉及び軍曹の手がすばやくホルスターに向かう。

(やややややヤバイっす!! な・・・ななんとかしないと・・・!!)

パニックを起こしそうな頭でアルが採った行動は・・・。

手に持った爆弾の掲げ

今まさに銃を構えようとしている軍曹の階級の隊員に

「うあああああ! 怖いっすー!!! あっち行けっすー!!!」

と叫んで爆弾を投げつけることだった

「へ?」

軍曹の隊員は自分の目の前に迫り来る爆弾に頭の処理が間に合わず間の抜けた声を上げる。

そして・・・

ゴチン

鈍い音がする。

「ぎゃ!?!」

爆弾は隊員の頭に直撃。気を失ったのか床に伸びる。

「この野郎!」

「くそ!」

中尉と准尉の隊員が銃を構える。

が・・・。

「銃は人に向けちゃいけないっすよ!!!!」

今度はアルが半分涙目になりながらアタッシュケースを投げつける。

「ちょ待て・・・ぐえっ!?!」

「アタッシュケースは無いって・・・ぐはっ!?!」

今度は迫り来るアタッシュケース（爆弾数個入り）に二人仲良く顔面直撃を喰らい完全に伸びてしまった。

「ハアハア・・・こ、怖かったす・・・」

アルが力なくその場にペタンと座り込む。

爆弾とアタッシュケースを投げつけて三人の軍人を倒した（と言っていいのかどうか・・・）アルはすっかり疲弊したような表情になる。

が、直ぐに気を取り直してアタッシュケースを手に取り、床に落ちてる爆弾を拾う。

「そういやここ使うとか言ってたっすね・・・別のところに仕掛けるっす」

アルは床に伸びてる三人の隊員をズルズルと引っ張って机の下に押し込める。

そうして簡易的にでも三人を隠したアルはそのまま大会議室を後にする。

「人の出入りが激しいところは危険っすね・・・どこかいい所は、と」

そもそもテロリストは死と破壊と混乱である物事を為そうとする者達のことを言う。

CICの作戦で見せかけのテロ活動とは言え、人が居なくて危険じ

やない場所を真っ先に探すアルはとことんテロリストには向いていないと言えよう。

「あ、いい場所見つけ」

基地の一番奥に物置があった。

人もまったく通らないところにある部屋だ。

アルはこっそりと部屋に入る。

そこには壊れた機関銃等が山積みになっていた。

おそらく訓練等で破損した銃器をまとめて入れておく場所なのだろう。

「ここならOKっすね」

アルは爆弾を銃器の入ったダンボールの中に一個、部屋の天井に一個、そして壁に一個と合計三個取り付ける。

爆弾の起動スイッチを押すと、赤いランプが点滅する。ジュンの起爆装置に「設置完了」の信号が送られている合図だ。

「はア、やっと終わったっす」

漏れるため息。だいぶ疲れたらしい。

アルはアタッシュケースをその場に置くと、そのまま部屋を出る。

「ついでに食堂でサンドイッチでも買っていくつす」

武器ブローカーや技術屋として活動していたとはいえテロリストであるアルが軍の食堂にサンドイッチを買いに行く……。

ビビリなのか大胆なのか分からない性格だ。

アルは安堵感に包まれながらフンフンと鼻歌を歌いつつ食堂に向かって行った。

本来ならば基地から出た時点で安堵すべきであり、軍内部にいながらすっかりリラックスできるアルはやはり大物かもしれない……。

ところ変わってサーナイトのイクスは……。

「いゃん、イケメン！」

立ち止まって雑談をしている隊員に見とれていた。

その隊員は茶髪がかった髪をしており、仲間達と雑談している。

甘いマスクの軍人だ。

イクスは今サイコパワーで自身の姿を隠しているので見つかる心配は無い。が、今は任務中。

仕事中でさえイケメンを見るとうっとり見とれてしまう……イクスの弱点である。

「あ、こんなことしてる場合じゃないわ！」

任務中であることを思い出したのか、イクスがハツとなる。

「早いところ爆弾をしかけましょ」

イクスが施設の外に出る。

広大な面積を誇るU S A 2基地を暫らく歩いていると・・・。

「あったわ。あれが・・・弾薬庫ね」

イクスの目の前には大きな倉庫があった。見張りが四人いる。おそらくあれが弾薬庫だろう。

イクスは見張りの四人の近くまで接近する。

しかし扉には嚴重なロックが施されていた。

（サイコキネシスで開けられるけど・・・まずは見張りを何とかしなきゃ）

イクスは手を見張りのほうにむける。

「催眠術」

手から放たれた特殊な波動を受けた見張り四人はその場に崩れ落ちる。

「サイコキネシス」

イクスが鍵に手をかざすと、カチャリという音と共に弾薬庫のロックが解除される。

「さてと」

弾薬庫内に見事侵入したイクスは辺りを見回す。

弾薬の入った木箱が山積みになっている。

カチリ、とイクスが爆弾を弾薬の木箱の横に数個セットする。

「楽勝ね。あ、外の見張りを非難させておかなきゃ」

イクスは弾薬庫の外に出ると、倒れている見張り四人を「テレポト」させる。

そしてそのまま歩いていったのだった。

また一方のクーは屋上に居た。

「ここからの景色はいい感じだな」

基地のヘリポートだけあって周りの風景が一望できる。

警備がかなり手薄であり、途中でUSA2の兵士に見られても修理か何かだと思われたことも大きかった。

「…………爆弾を仕掛けて破壊するにはもったいないけど、やる

しかないか」

ため息をつく、クーはアタッシュケースをパカリと開ける。

黒いボディの爆弾をヘリポートの直ぐ横に設置する。

カチリとボタンを押すと赤いランプが点滅する。

「これでジュン君の起爆装置に信号が送られる……僕の仕事はここまでだ」

クーは屋上から階段を使って降りる。

そしてその頃……。

「おい、大丈夫か!？」

USA2の物資輸送トラックを何気なく除いた隊員が、中で猿轡をされグルグル巻きにされている隊員を見つけたのだった。

猿轡を解いてやると、隊員が途切れ途切れに言う。

「……この基地にネズミが入り込んだ……」

第十一話 トワイライト開始 爆弾を設置せよ（後書き）

次回はポケハンで

第十二話 ブラウン少将の友人

ここは陸軍本部。

その長い廊下を1体のポケモンが歩いていた。

茶色のフサフサとした毛並みに、長い耳。茶色の尻尾は歩くたびに揺れる。

特注の小さな軍服の型飾りには将官の証明である房飾りがある。

また胸には勲章がつけられていた。

「おはようございます。ブラウン少将」

イーブイのフリードリヒ・フォン・ブラウンこと、ブラウン少将が歩いてきたのを見て、すれ違った兵士が敬礼をする。

「ああ。おはよう」

軽く返事を返しておくとともに進んでいく。

そして、ここは司令官室。

扉を開ける（ブラウン少将専用の取っ手がついている。彼の身長の高さのところに小さな小窓が設置されているのだ）と、机に座っている秘書が言う。

「少将、お客人がお待ちですわ」

「久しいな・・・何年ぶりか」

そう呟くと、奥の部屋へと進んでいく。

USA2に対する擬似爆破テロによる、軍事情報入手計画「トワイライト作戦」成功後、ジュンが入手したデータを下に確固たる証拠を掴むことが出来た。

そこでブラウン少将はそのある協力者と今後の話し合いをするために、軍で合うことにしたのだが・・・。

そこには接客室があり、座って優雅に紅茶を啜っていたのは・・・。

ピンク色のポケモン、ミュウだった。

「待たせたな」

「久しぶりですね。フリードリヒ」

ミュウがカップをマグソーサーにカチャリと置く。

「・・・随分出世したようですね。・・・中佐でしたっけ？」

「それは何年前の話だ、ミュウ。俺は今少将だよ」

スプリングが効いたソファに座るブラウン少将。ミュウとは親しい間柄らしく、主語が私から俺になっている。

「おっとそうでしたね。長く生きていると時間の感覚がずれてくる

もので」

ミュウが机に置いてある小皿に盛ってあるビスケットを一枚取る。

「お前にとってはな。だが俺にとっては違う」

ブラウンは被っている軍帽を前足で取ると机に置く。そして頭の癖がついてしまった毛皮を爪で整えながら、素っ気無く言う。

「俺はもっと上に行きたい。行かなければならないんだ」

「・・・貴方は今36でしたね」

「ああ・・・周囲には水増しした年齢を言っているがな」

「全く。年齢をサバをよんでどうするのです」

「・・・ミュウ、お前には分からんよ。縦社会の軍では年齢は大きな壁だ。俺が何故こんな若年で少将になったと思うんだ。情報部には優秀なロスも居るというのに」

「貴方の指揮能力の高さでは？」

ミュウの答えにブラウンは首をゆっくりと横に振る。

「それもある。だが、もっとも大きな理由は俺がポケモンだからだ。軍の奴らはイメージアップのためにポケモンを出世させたんだ・・・異例のスピードで。ポケモンでも、平等に扱い、出世できる組織ってことをアピールするためにな」

ため息が漏れる。

悲しい。

自分はやるべき事をこなし、努力も重ねている。

実績を積み上げ、周囲の信頼と尊敬をも勝ち得たのに……。

結局はポケモンであることを理由に、出世するなんて。

能力を、自分を純粹に見て欲しかった……。

「なら、それを利用すればいいことです。初めが広告塔として利用されたとしても、貴方の能力の高さと人徳で頂点に上り詰めればいいのです。……私は期待していますよ。貴方はやる男です」

その言葉にブラウンが顔を上げる。

「そうだな。俺はやるぞ。……俺は軍を内側から変える。変えてみせる」

ミュウが笑顔になる。

「そう、その粋です。さてと、本題に入りましょうか……今日私がおここに来た理由。お分かりですね？」

「エリカ達のことだな」

「その通りです。……君達の方の成果を教えてください」

「此方の調査によれば、エリカ達はC I CやP・H・Cから優秀な科学者や人材を取り込み、【スキエンティア】なる組織を立ち上げた。エリカ達は当初、C I CとP・H・Cの協力の下ポケモンのキメラの研究をしていた」

「ポケモン同士を人工的に掛け合わせるあれですね・・・」

「そうだ。その後エリカ達は計画が中盤に差し掛かったのを気にC I CとP・H・Cの機密情報と開発中のキメラ技術をネタに国際安全保障軍、U S A 2に協力元を変更した。まあ【スキエンティア】はP・H・CとC I Cをスキャンダルで潰そうとしていたらしいが、ある人物の機転でそれは免れた」

「そして今に至ると」

「ああ。だが話はこれで終わりじゃない。エリカ達はU S A 2から大量のミサイルを調達していたことが発覚した。しかも大陸弾道ミサイル・・・所謂長距離ミサイルをな」

「解せませんね。キメラ技術とミサイルですか。接点が見つかりません」

「ああ。だが、此方の協力者が得た情報からある事が分かった」

ブラウンは前足でティーカップを掴むとゆっくりと飲む。

濡れた毛皮をずっとハンカチで拭うと、口を開く。

「エリカ達は世界各地からウィルスの株をU S A 2を通して購入していた。恐らくウィルス研究もしているのだろう。・・・U S A

2の兵器開発センターも【スキエンティア】に取り込まれている可能性がある……」

あの巨大な組織が、USA2が……エリカの影響を受けているとすれば恐ろしいことだ。

「ウイルスとミサイルと来れば……生物兵器ですか。彼女らは戦争でもするつもりですかね」

「そこまでは分らん。だが、ミサイルを使ってウイルスを世界にばら撒くつもりなのは確かだ。だが実態は掴めずじまいだ。……ミユウ、そちらはどうだ？」

「私はこの数年、神と呼ばれしポケモン達の影響力が急激に低下していることを感じ、調査をしてきました。その結果分かったことは、【スキエンティア】と名乗る謎の集団が最高神アルセウスと空間の神パルキアを捕獲した、ということとあちら側に炎を司る神、レシラムがついているということです」

「まったく……」

ブラウンは前足でこめかみを押さえる。沈痛な面持ちだ。

「ウイルス兵器にミサイルにカメラ技術に神と呼ばれしポケモン！エリカの頭の中はどういう構造になっているんだ！？意味が分からん……何をしたいのか全く不明だ！」

「それは私も同じです。フリードリヒ。しかし、倒さなければいけない相手であることは確かですよ」

ずっと顔を上げるブラウン。何時もの知将の表情ではなく、不安げなイーブイの顔になっている。

「エリカの海上研究所はU S A 2の海軍が守っている。内部には警備兵・・・今回の件はC I Cの他のトップの連中に知られるわけには行かない。欲に目が眩み、エリカの技術を奪おうとする馬鹿が必ず居るからな。キメラ技術はここで根絶やしにしなければならん」

「そして出来ればU S A 2との交戦も避けたいと」

「もちろんだ！彼らとの戦いだけは避けなければいけない。・・・双方無駄な犠牲者が出るだけだ。倒すのはエリカだけで十分なのだから」

ブラウンの尻尾がゆらゆらと左右に揺れる。

感情が高ぶってきたときの彼の癖だ。

「・・・しかし困りましたね。私もとある協力者を呼んでいますし、私自身もそれなりの実力があります。が、戦わずに海上研究所内に入り、キメラ技術を破壊するとなると難問ですね」

ミュウはふうとため息をつく。

「ああ。U S A 2の上の奴らはともかく、現場の兵士たちには何の罪もない。・・・罪の無いものが苦しんではいけないからな」

ブラウンが窓の外を眺める。

「そういえば貴方が軍に入ったのも、その思いからでしたね」

思い出したように言うミュウ。

「ああ。士官学校を出て、軍に入ったのが昨日のようだ。時間が過ぎるのは早いな」

最近こそポケモンも軍などの組織に入るようになってきたが、ブラウンが士官学校に居た頃は学校内でポケモンは彼ただ一人だった。

しかもイーブイという小柄なポケモンでは尚更だった。

「――ミュウ」

ブラウンが重々しく口を開く。

「何でしょう？」

「俺にある作戦がある。エリカ達の意表をついた作戦が」

「……続けてください」

「USA2が国際テロ組織【赤い満月】と組み、自らの利益になるように自作自演の戦いを繰り広げてきた件の決定的な証拠の数々は此方が掴んでいる。そして、エリカ達の技術によって生み出されたキメラポケモンを兵器利用しようとしていることも」

机に紙を広げると、ブラウンは前足でペンを持ち器用に関係図を書いていく。

【スキエンティア】↓USA2に開発したキメラポケモンを提供

【USA2】↓スキエンティア側に多額の資金を投資。さらにはミサイルやウイルス株も提供。

【赤い満月】↓USA2と自作自演。戦いを通じて自分たちの主張を世間にアピール

【USA2】↓赤い満月と自作自演。戦いを利用し自らの権力維持と利益に誘導する。

「つまりエリカ達【スキエンティア】も国際テロ組織【赤い満月】もUSA2に頼るところ大きいということだ」

エリカ達の活動源の源はあの巨大な軍がバックにあってこそ。

「俺はここから崩そうと思う」

「まさかUSA2を攻め落とす・・・」

「いや。現場の兵士に真実を伝え、こちら側に従わせる」

その言葉にミユウが目を剥く。

「馬鹿な！そんな事をすれば・・・兵士達から上層部に伝わり、USA2は証拠隠滅を・・・」

「これは賭けだ。現場の兵士にUSA2がこれまでやってきた数々の暴行を有無を言わせぬ証拠を提示する。軍から腐敗した病巣を取り除くためには、エリカを倒した後世間にこれらの問題を問わなければならぬから戦わず引いてくれ、とな」

ブラウンは再びティーカップに口をつける。

ミュウは何度目かのため息をつく。

「・・・いいでしょう。ただしそれで彼らが動かなければ、倒して進むしかないですね」

「致し方あるまいよ、ミュウ。これは戦争だ。軍と巨大企業を手玉に取り、壮大で危険な陰謀を目論む一人の少女とのな」

そして【スキエンティア】は科学者達の集まり・・・言わば頭脳集団だ。

油断は禁物。全力で行かなければな・・・。

「將軍殿は色々とお考えですね」

ミュウの茶化した言い方にブラウンは少し微笑む。

「俺はこれでも少将だ。上に居るからには、果たすべき責務がある。逆を言えば責務を果たせぬ者は上に居てはならないことだ。俺は責務を果たせぬ者を攻めるつもりはない。適材適所という言葉通り、果たせる者と果たせぬ者。二者が居て当然だと思う。能力が欠けているものを攻めるのは傲慢だ。そいつの器に合わせぬ地位は、当人にとっても周囲にとっても重石になるだけだ」

「フリードリヒ、貴方には大きな器があります。信じていてすよ・・・共に戦いましょう」

「此方こそ」

ミュウとブラウンは共に握手を交わしたのだった―

その後ミュウは指を鳴らし、どこかにテレポートしていった。

そして・・・。

ブラウンは同じ部屋である人物を呼んでいた。

「失礼します、少将」

入ってきたのはロス大佐。

「ああ・・・そこに掛けたまえ」

ブラウンが促すと、大佐はゆっくりとソファに座る。

「何か御用でしょうか」

「・・・ロス、レオン・J・ホーガン大尉の件だが」

その言葉にロスが悲しそうな息を漏らす。覚悟していた表情だ。

「ええ・・・分かっていましたよ。やはりその件ですか」

「彼は確か対テロ用特殊部隊デルタチームの隊長だったらしいな。彼にはある過去があるらしいが・・・お前なら知っているはずだ。教えてくれないか？」

「・・・レオンはエリカに利用されています」

大佐が宙を見つめながら弱弱しく言う。

「彼は優秀な兵士でしたが・・・ある事件の事を引きずっていました。そして恐らくその傷をエリカに利用されたのです」

ロス大佐はゆっくりと重々しく話し始めた。

レオンの過去を。

第十二話 ブラウン少将の友人（後書き）

ブラウン少将はただいま36歳です。

ずっと39と言っていたのは彼自身が広告塔として出世させられていたことを気にしているから。

だいたい三十代中場で少佐／＼中佐は士官学校出の人で多い中で、少将というのはどれだけ異例かが分かります。

第十三話 暗躍（前書き）

今回は非常に重要なお話です！

時間軸的には、エリカとの決戦の数日前です

第十三話 暗躍

「少将、どちらに行かれるのですか？」

ブラウン少将が廊下を歩いていると、兵士が声をかけてくる。司令官室から離れた場所なので、普段は来ないところだ。

「うむ、ちょっと雑用でな」

軽く答えると、歩みを進めていく。些か早足になる。

（今日は大事な日だ・・・）

ここは陸軍本部。

そして、向かう先は本部の地下2階。

関係者以外立ち入り禁止のドアを開け、今は使われていない旧第一会議場の扉に手をかける。

少将の目が周囲を見回し、誰も居ない事を確認すると旧会議室に入る。

そして、会議室の奥の部屋の本棚から一冊の本を取り出す。【世界の福音書】という名前だ。

およそ軍にある本とは思えないそれを取り出すと、その奥には小さなスキャナーが埋め込まれていた

「……ゴスペルめ、今日は定時報告の日では無いというのに」
少しぼやくと、ポケットから一枚の磁気カードを取り出す。

表面にはGPの文字が刻まれており、少将が磁気カードをスキャナーに通すと本棚が横に音を立ててスライドし、隠し通路が出現する。ブラウン少将が通路に入ると、自動的に本棚が元の位置にスライドして隠し通路を閉じる。

通路の奥にはエレベーターがあった。パスワード形式らしく認証装置が取り付けられている。

ピッピッピ

前足でパスワードを入力すると機械音を立て、エレベーターの扉が開く。

「ふう。何時もここに来るときは少し緊張するな……」

ため息をつくと、少将はエレベーターに乗り込む。

ウィィィィン

エレベーターは地下深くに降りていく……。

ピン

少しの間して、軽快な音と共にエレベーターの扉が開いた。

そこには陸軍本部の地下とは思えない光景が広がっていた。

巨大な部屋には青い大きな六角柱がある以外は何も無い。

澄んだ青の結晶は深い海の色合いだ。

また部屋の壁の一面に数多のラインが血管のように走り、赤い光を発している。

《来ましたか、ブラウン》

結晶柱から声がする。機械的な声だ。

「私に何の用だ、ゴスペル。今日は定時報告の日ではないはずだが？」

少将は歩きながら少し顔をしかめる。

《USA2と国際テロ組織【赤い満月】との繋がりとは断ち切れそうか、少し疑問が浮かび上がったので呼びました》

「ふん、心配ない。あの不安要素の小娘を潰せば断ち切れる」

ブラウン少将が無然と答えると、声・“ゴスペル”が少しの間を置いてから言った。

《当初の計画通り、ジャック・ハワードが大將に就いてからUSA2は国際テロ組織と裏で手を結び、利益を得るように誘導してきました。私の計算どおり、USA2は赤い満月との自作自演の戦いを繰り広げてきたのです。そして計画は第二段階に入り、USA2と

赤い満月の関係を切る時期に入りました》

「分かっている。正直、エリカがUSA2手玉にとって独自の計画を進めていることを知ったときは驚いたがな。・・・今度、その研究所に攻め込み、エリカの計画を破壊する予定だ」

《彼女の存在は私にも予想外でした。しかし、それは計画の段階移行が少し早まっただけのことです。エリカは私達にとっても脅威となりえる存在です。ブラウン、貴方にこの件の処理は任せます》

「・・・私は正直微妙な気持ちだよ、ゴスペル。これから行おうとしている行為が本当に世界のためなのか、な」

その場に座るブラウン少将。視線が少し落ちる。戸惑っているような、哀しんでいるような表情だ。

《計画遂行のためには多少の犠牲は必要なのです。戦いが起これば、そこに戦う者達からエネルギーが放出されるのですから。そしてそれこそが未来への礎となります》

“ゴスペル”の言葉にブラウン少将が軍帽を被りなおす。ピンと立った大きな耳が帽子に押される。

「まあいい。私はお前に生み出された人工生命体。生みの親に従うだけだ」

そう言うってから少将の目が少し泳ぐ。考えをまとめているようだ。

暫らくしてから疑問が自然とわきあがってくる。

「それはそうとして、ハワード失脚後の別のトップは用意してあるのか？」

《ええ。既に用意してあります》

「そうか」

《ブラウン、貴方は優秀な代行者です。貴方には軍の実権をさらに掌握してもらわなければいけません。計画遂行のためにも》

ブラウン少将が少し苦笑する。ため息をつくと、間を置いてから口を開いた。

「実権を握るのはそう容易いことではないぞ、ゴスペル」

《分かっています。別の代行者を軍に送り込みましょう。必ず貴方の役に立つはずです》

青い結晶柱から発せられる言葉。機械で変換されているため、男性か女性かは分からない。

「そうか・・・」

考え深げに少し視線を落とす少将。

ゴスペルは言葉を続ける。

《陸軍には貴方の他にも代行者を配置しています。彼らと協力し計画を進めてください》

「了解した」

少将はそう答えると、エレベーターの方に向かって歩く。

そしてエレベーターに乗り込もうとした時、“ゴスペル”が声をかけてくる。

《ブラウン、私は貴方に期待していますよ。世界に福音を》

「・・・了解だ。世界に福音を」

素っ気無く答え、エレベーターに乗り込む。

ピシヤリという音と共に扉が閉まり、ブラウン少将を乗せてエレベーターは上昇していった。

これからエリカ達【スキエンティア】の海上研究所での決戦の準備をしなければならないのだ。

そしてブラウン少将が去った後しばらくして、【ゴスペルの間】に別の存在がいた

腕を組み、結晶柱の前に立っている。

「ブラウンは上手くやりますか？」

《彼は私が創り出した代行者の中でも群を抜いて優秀です。心配は要りません》

ゴスペルの言葉にその人物が頷く。

「それは仰るとおりです。彼は見事に周囲の信頼と軍内での実権を握りつつありますから」

《ブラウンは軍全体を動かす役目を与えています。いずれそうなるでしょう。私の糸に引かれる形で。そしてアナタは軍を内側から観察する。それがアナタの役目です》

「了解しています、少しでも怪しげな情報があれば全て削除・回収をしておきます」

その人物はサッと敬礼仕掛かったが、やらずに手を下ろした。軍人としての癖なのだろう。

《ロス大佐にブラウン少将から促す形で【赤い満月】の大物についての情報入手、そしてUSA2と【赤い満月】の自作自演の戦いと利益誘導を発覚させるところまで、全て計画通りです》

「もしや・・・ゴスペルはイプシロン中尉がジュン君を頼るところまで計算済みだったのですか？」

これには驚いたようでその人物の目が見開かれる。

《氷室準の恩人である元大物テロリスト、コードネーム【クロウ】は今でも裏世界に通じています。イプシロンがそんな裏世界の人物と友好関係を持っているジュンを頼らないわけがないのです》

「なるほど・・・それとですね・・・陸軍は良いとして、空軍と海軍は如何なさるのですか？」

《既に代行者を創っている最中です。もう少しもすれば海軍にも空

軍にも送り込めるでしょう。私の意志通りに動くようになるのは時間の問題です」

「・・・抜かりがないですね」

《私の計算には不確定要素はありますが、ミスはありません》

その人物の身構えたような言葉にも、ゴスペルの語調は全く変わらない。

機械のような声。何処までも無機質な声だ。

ピピピピピ・・・と青い結晶柱に数字が走る。

《世界に福音をもたらすために、今後一層の成果を期待します》
ゴスペル

「了解しました、我が創造主ゴスペル」

今度こそ敬礼をすると、その人物は踵を翻しエレベーターの方に歩いていく。

その人物はエレベーターに乗り込むと、ホルダーの銃を弄りながらスッと目を瞑った。

始まるのだ・・・。

「・・・これから忙しくなるな・・・」

そう呟いたのと同時に、エレベーターの扉が開く。

本棚が自動でスライドし、潜るとまたもとの場所に戻った。

誰にも見られることなく。

カッカッカ

その人物は旧会議場を後にしたのだった――

第十四話 代行者（前書き）

今回はあの人の登場です。

第十四話 代行者

陸軍旧会議室の隠し扉からエレベーターを使い、地下に降りること400m。

陸軍の地下には殆どの軍関係者が知らない広大な地下空間が広がっている。

そしてその空間の中央には青い六角柱の結晶がそびえ立っている。

その結晶柱を中心に床には血管のような幾何学的な線が描かれていた。

カッカッカ

その空間内に歩みを進める人間の団体があつた。

軍服ではなくスーツ姿であることから、なんらかの交渉に来たことが伺える。

『よく来ましたね』

青く澄んだ結晶体から声がする。

「ゴスペル、ご報告に参りました」

中央の一番地位が上そうな男が頭を下げる。

『大仰にしなくていいですよ。室井社長。単なる新型ミサイルと戦

闘機の商談なのですから』

室井信二。今ゴスペルの前で跪いている男の名だ。

株式会社ムロイエレクトロニクスの社長でもある。

この国でも指折りの大企業であり、コンピューター関連で凄まじい技術力を誇る。

そしてこの企業は軍需産業にも手を出しており、新型ミサイルや戦闘機の開発を率先して行っている。

いまや世界の軍が正式採用している兵器の半数近くがこの会社が中心に開発したものだ

「では早速・・・新型ミサイルシステム『パトリオット?』の開発に成功いたしました。実戦は未経験ですが、従来の追撃能力を遥かに上回ります。それに加えて最新作の戦闘機、F-17が実験段階に入りました。既に世界各国の海軍や空軍と仮契約が完了しております」

そこまで言うとは横で控えていた部下が書類をゴスペルの下にそっと置く。

結晶柱が光り、書類がふわりと宙を浮く。

誰の力を借りるでもなく宙に浮かんだままパラパラとページが捲られていく・・・。

暫らくしてからゴスペルの声が部屋に響いた。

『素晴らしいですね。では早速試してみたいところです。今度は何処で紛争を起こしましょうか』

「ゴ・・ゴスペル。また戦争を起こすのですか？少し様子を見ては・・数年前に紛争を起こしたところでは・・・」

室井社長がおずおずと口を開く。

『室井。貴方はここまで来て及び腰になっているのですか？』

ゴスペルの問いに慌てて室井社長が首を横に振る。

「いえそういうことでは・・」

『反魂石を作るには大勢の人間の“死”が必要なのです。つまり争いがあればあるほど製造量も質も増す』

青い結晶柱が光を発する。

慌てて跪く室井社長達。

「存じ上げております。しかし、戦争の誘発の代行組織USA2が崩れようとしている今、その代わりになる存在など・・・」

そこまで言って室井社長はハッと口閉ざし黙る。

『察しましたね。その通り。貴方達が今いるここ。この陸軍を第二の戦争誘発のための布石にする予定です』

ゴスペルの恐ろしい言葉に室井社長だけでなくお供として来た全員が驚愕の顔になる。

これまで彼ら、ムロイエレクトロニクスの幹部はゴスペルと組み、世界各地で戦争を誘発する手助けをしてきた。

過去20年間に起こった世界各地の紛争にゴスペルと共に一枚噛んで来た。

全ては利益と利権のため。金のためだ。例えその金が血と人の犠牲の上に成り立っていたとしても。

争いが起こるたびに彼らの会社の武器が飛ぶように売れ莫大な利益が懐に入ってきていたからである。

そしてその戦争で得た詳細なデータを下に、さらに強力な兵器を開発し、新たな戦争の火種を見つけてはそれを育て争いを起こす。

そうした事を長きに渡ってやってきた。

軍需会社として戦争は大歓迎なのだ。

しかしそれは遠く離れた海外で争いがあった場合の話。

自分達の居るこの場所、この国で大規模な戦争を“誘発”させるなど・・・想像もしていなかった。

身勝手さの極みだが、人間とはそういうものだ。

ゴスペルは室井達のそういう身勝手さを巧みに操り、彼らを利用し

ているのだ。

最も室井社長達はそれに気づいていないのだが……。

「しかし、今この陸軍情報部のトップ、フリードリヒ・フォン・ブラウン少将は如何するのです？彼もまたゴスペルがお作りになった人工生命体ですが、聞くところによると戦争を何としても回避しようとする傾向があるとか……」

手に汗をかきながら室井社長は何とか言う。

どこかにこの国で戦争を起こそうとするゴスペルを止めようという意思が少しあるのだろう。

何時にも増して緊張している。

それに対してゴスペルの返答は簡潔だった。

『フリードリヒの事なら心配ありません。・・確かに彼は戦争を絶対に回避させようという“代行者”としては難がある性格です。しかし、もう既に別の代行者を用意してあります。過去10年間USA2に誘発させてきた戦争、その争いの中で死んでいった人間達の魂を固め創った反魂石を核に生み出した代行者が』

ゴスペルの言葉は何処までも無感情だ。

室井社長達が不安そうに顔を見合わせる。

どうやらこれまで懐に入ってくる利益に目が眩み見えていなかった事態の重大さが、事ここに至って恐ろしくなってきたらしい。

『ではこれから頼みますよ、室井社長。必要な書類は貴方達の本社にメールで送っておきます』

「は・・失礼します」

急いで外に出る室井達。

「奴らはそろそろ使えなくなってきたんじゃないか？」

全員が出て誰も居なくなった空間に一人の男性の声がある。

青い結晶柱の真後ろの人工生命体培養カプセルの中からだ。

『そうでもありませんよ、オプスレイ。まだ利用価値はあります』

「ふん、まあアンタがそういうならいいんだけどな」

カシユウ

カプセルが空き一人の青年が全裸姿のまま出てくる。

身長は175センチほど。茶色がかった髪と精悍な顔立ちだ。

体のあちこちに貼り付けられたコードを取り外し、装置の中に投げ捨てていく。

『オプスレイ。貴方は北東基地から編入された陸軍中佐という立場です。ブラウンと共に私の計画の礎となってください』

「・・・俺はアンタから作り出された人工生命体。大勢の人間の“死”を基礎に作られる反魂石を核にした人造人間。いいぜ、代行者として軍を動かす。その割には立場が中途半端な気がしないでもないが、な」

『下士官、仕官全ての立場に代行者を潜り込ませることで精密な支配が可能となるのです』

「なるほどな」

用意してあった軍服を引っつかむとオプスレイは着替え始める。

『言い忘れていましたが正式に中佐として軍に赴任するのはブラウンが帰ってきてからです。それまではここに居てください』

「ああ。分かってる。・・・第二次世界大戦から約60年。そろそろ大きな戦を起こす時だ」

オプスレイは陸軍の軍服を羽織り腕を通す。中佐の階級を示す襟の階級章が部屋を包む青白い光を受けて怪しい輝きをたたえる。

「戦争になれば各国の軍が正義のために戦い人が死んでいく。そいつらの死は俺達の力となる。そうして得た力を使いまた別の戦争を起こす。ハハッ・・・恐ろしいほど合理的だな」

『戦争は人間達の性格にもあっています。この国でも大勢の人間が、軍人、民間人問わず死ぬことになるでしょう。しかしそんな犠牲な
ゴスベル
ど私の計画からすれば埃のようなもの。世界に福音をもたらすため
には』

部屋のあちこちに張り巡らされた血管のような線。

その線を青い光を放つ液体がさらさらと流れていく。

人間の魂を液状に変化させた反魂液は青く美しく輝いている。

「あのイーブイは何時帰ってくるんだ？ さっさと軍に中佐として出向きたいんだけどな」

首を回し生み出されたばかりの体を慣らすオプスレイ。

『もう少し待つのです。エリカの件が済めば直ぐにこの陸軍基地に戻ってきます』

「そうか。それともう一つ質問だ。空軍と海軍はどうすんだ？ もう代行者は送ってあるんだろうな？」

その質問にゴスペルは即答した。

『今の空軍と海軍のトップの数名は私の息のかかった者です。しかし空軍と海軍用の代行者を創るには反魂石の材料である反魂液の原料……人の“死”が決定的に足りない』

「つたくよお……反魂石作るのに自然死は駄目つうのはメンドーだな」

頭をバリバリ掻き愚痴をこぼす。

『なるべく無念と怨念、悲劇性を保持する死でなければいけません。その死を量産するには戦争を起こすしかないのです』

「ふうん。それとこの国の防衛省も押さえてんのか？」

『無論です。しかし役人を操るだけでは戦争を起こすことは出来ないのです、軍に重点的に代行者を送り込んでいるだけのこと』

「・・・国際安全保障軍、USA2には代行者は送ってなかったのか？」

『言っていませんでしたか？そのUSA2の最高司令官ジャック・ハワード大將は私の手駒の一つです』

「手駒とは人聞きの悪い。代行者と呼んでくれ、我が神ゴスペルよ」
突然後ろから深みのある声が聞こえる。

驚いたオプスレイが振り返るとそこには50代後半に差し掛かった男が一人立っていた。

深い緑の軍服に飾り紐、肩には軍の最高の地位『大將』の階級章がつけられている。

そう国際的な安全保障に関する事件、主にテロ事件を鎮圧・解決するために存在している多国籍軍USA2のトップ。

ジャック・ハワード大將だ。

「アンタは・・・」

「新たに目覚めし代行者か。懐かしい・・・昔を思い出すな」

ハワード大將はフツと笑みをこぼすとゴスペルの近くにある培養装置に腰をかける。

「始めましてだな。新米の代行者君。私はゴスペルに創られし代行者が一人。・・・君と同じ人工生命体だ」

スツと手を伸ばしオプスレイに握手を求める。

「・・・こちらこそ。俺はゾディア・オプスレイ」

警戒しつつ握手に応じるオプスレイ。

「アンタの活躍は培養装置の中で耳にしてるぜ。表向きは世界の平和と秩序を守る多国籍軍のトップ。だが裏の顔はUSA2に戦争を誘発させ、鎮圧させて軍の利権と権威を保つ・・・自作自演の“戦争”を引き起こし続けてきた張本人ってな」

その言葉にハワード大將はクツクと笑う。

先程の紳士的な雰囲気が一瞬崩れる。

「その通り。私はテロリストと協力し、世界各地の世情不安な地域で大規模なテロ事件を起こさせ、テロリストとの戦争を“誘発”させてきた。ま、自分達に勝ち目が無いのは協力してくれた相手達も^{テロリスト}承知の上だが」

この上なく愉快的な話題のように微笑むと再び言葉を続ける。

「要するに金だ。テロリストのトップ達の部下が戦いで犠牲になる代わりに、トップ達には巨額の富が転がり込んでくる。だが、それ

だけではない」

足を組みなおしハワード大將はゆっくりと再び話し出す。

「テロリスト達を鎮圧し倒すだけでは戦死者の数は増えん。我が軍の隊員達にも大勢戦死してもらわねば、反魂石を作る材料が揃わない。だから、軍の装備を・正式採用のアサルトライフルM16や軍用ヘリアパッチをテロリストに横流ししてきたわけだ。軍の隊員とテロリスト両方の人間が大量に悲劇的な“死”を迎えるためのお膳たてというわけだ」

恐ろしいハワード大將の言葉にも嫌悪感を示す者はこの部屋には居ない。

オプスレイはヒューを口笛を吹きケラケラと笑う。

「いやア怖いねえ。軍のお偉いさんが人工生命体で、ここまで非道な奴だとは」

「茶化さないで貰おう。人間の死など知ったことか。全てはゴスペルのためなのだ」

『ハワード。わざわざ危険を冒してまでここまで来たのにはわけがあるのしょうね?』

ゴスペルの無感情な質問。

「無論だ。ゴスペル、どうやらUSA2が自作自演の戦いをしてきた事が軍内部で噂として広がっている。私の見るところではもうすぐあの軍は空中分解する」

曲がりなりにも自らが率いてきた軍が分解する事に何の感情も抱いていないようだ。

ハワードの言葉にゴスペルの口調が少し変化する。

驚いた様子だ。

『そうですか。予定より少し早いですね。もう少し持つかと思っていましたが』

「ゴスペル、貴方の判断を仰ぎに来た。どうする？ 隊員の一部を煽動して反乱分子に仕立て上げて内部で紛争・・・みたいな展開にするか？」

まるで劇作家のような口調で提案するハワード大将。

暫らくゴスペルは黙っていたがやがて口を開いた。

『いえ、その必要はありません。ハワード、再びUSA2に戻りなさい。そして崩壊する直前に自殺を装いここに戻ってきなさい。その頃にはブラウンも戻っているでしょう。一度代行者を集めて今後の方針を決定する必要があります』

「・・・了解した」

カッカッカ

ハワード大将は一礼すると、足音を響かせながらゴスペルの下を去っていった。

「さてと、俺はもう少し休ませて貰うぜ。体内の反魂石の調整もしなきゃいけねえし」

うん、と伸びをするとオプスレイもその場を立ち去ろうとする。

そうすると背後からゴスペルの声が聞こえてくる。

無表情ながら威圧感のある声だ。

『ゾディア・オプスレイ陸軍中佐。新たな代行者よ。私のために働いてくれますね?』

「了解」

サッとオプスレイは片手を上げて、用意されている自らの部屋に歩みを進める。

オプスレイが居なくなった後、ゴスペルは一人で考え事をしていた。

（この世界には人間とポケモンの両者が暮らしている。二つの世界は接点こそあるものの決して交わりはしない。不完全な生命体を完全に完成させなければ・・・）

青く輝く六角柱の内部。

人間とポケモンの“嘆き”が凝縮された結晶の中からゴスペルは世界を見る。

不完全なこの世界を。

軍を地下から操るこの支配者の影は少しずつ、だが確実に陸軍を侵食し始めていた。

世界の歴史の闇に常に存在していたゴスペル。

その存在をまだ川神雄太ことイプシロン中尉や人間、ポケモン達はまだ知らない――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9719m/>

イプシロンの任務遂行記

2011年10月6日01時00分発行